天皇制と明治神宮体育大会（第２報）

保健体育科教育教室　入　江　克　己
*鹿　島　　修

は　じ　め　に

（第１報）では，明治神宮大会の展開過程の第２段階（神宮大会の創始の過程から第４回大会まで）までを報告したが，引き続き，この小論では，第３段階（第５回大会から第８回大会）から第４段階（第９回大会から第12回大会）の展開の過程について報告する。

11．絶対天皇制と神宮大会

１．第５回大会と天皇の「行幸」

（１）秩父宮の大会総裁就任

第５回大会の特徴は，何と言っても秩父宮の総裁就任と天皇の臨席である。秩父宮が総裁に就任するに至る経緯について『報告書』は，「秩父宮殿下を本大会の総裁に仰ぎ奉る事については，九月二十五日御快諾の旨正式に阪谷神宮体育々会長宛御通達あらせられた。誠に体育会の光栄である。更に殿下には十月十日本会総務委員，評議委員一同を表町御殿に御召しになって拝謁を賜った[1]」と記している。

この大会に天皇が臨席することは本人の意志によるものであったが，宮内大臣一木喜徳郎は，昭和４年９月28日に小橋文相に対し「今回第五回大会ヲ開催スルニ当リ，畏クモ天皇陛下ニハ体育奨励ノ思召ヲ以テ本大会ニ行幸アラセラレルヘキ旨仰出サレ，昭和四年九月二十八日阪谷会長ハ文部省ニ出頭シ，小橋文部大臣ヨリ右御通達書ノ伝達ヲ受ケタリ。斯クノ如キ本邦体育会ノ栄誉ニシテ誠ニ感激措ク能ハス[2]」との文書を送付している。そして文相は，同日神宮体育会会長に「天皇陛下来十一月一日，第五回明治神宮大会へ行幸可被為仰出候，条此旨体育会々長へ伝達可有之候，追テ当日雨天ノ節ハ十一月二日行幸可被為在候，（中略）畏クモ天皇陛下ニハ第五回明治神宮体育大会ニ行幸アラセラレルベキ旨仰出サレタル趣，本日別紙の通宮内大臣ヨリ通達有之タルニ付，茲ニ伝建ニ及フ，今回明治神宮体育大会ニ行幸アラセラルルハ，汎ク体育御奨励ノ思召ニ出テサセラレタルモノト拝承シ，洵ニ感激措ク能ハス，我邦体育会ノ光栄之ニ過キタルト共ニ，其ノ責任愈々重キヲ加フル次第ナリ，貴会ニ於テハ益々勵精努力一層実績ヲ挙ケ，優渥ナル御思召ニ副ヒ奉ランコトヲ期セラレルヘシ[3]」と通牒している。

＊日本サッカー協会機関誌『サッカー』編集部

（２）天皇の「行幸」と「奉迎部」の設置

そのため神宮体育会は，「奉迎部」を設置し，「奉迎」の準備をすすめている。

「㈠ 総務掛　行幸事務の大綱を定め，各掛の連絡を図り，経理其の他の掛に属せざる事項を扱ふ。㈡ 警備掛　競技場内の警備に関し関係官庁と連絡を保ち，予め適当なる警備方法を定め，又当日の警衛に当るものとす。㈢ 儀礼掛　奉迎式，敬礼等に関し，予め関係方面と打合せをなし，その具体案を作成し，且つ当日の必要なる任務に当るものとす。㈣ 皇族掛　当日の台臨に関し御招待，御接待等の事項を取り扱ふものとす。㈤ 接待掛　特別招待者の範囲を定め，招待状の発送、当日の受付，案内，食事，その他の接待に当るものとす。㈥ 競技掛　天覧競技に関し当該競技部と緊密なる連絡を保ち，競技の進行(特に天覧時刻に注意)，競技の前後及び競技中の御出入に際し行ふ起立，敬礼に就き必要なる事項を取扱ふものとす。㈦ 新聞掛　新聞記者席，写真班席の位置(中略)等を予め選定し，且当日の発表並に撮影に関係せるものを取り扱ふものとす。㈧ 交通掛　皇族，特別招待者の車場に関し，其の場所，設備等を調査し，設備係と連絡を保ちて適当に準備を行ひ，当日は車場の整理に当るものとす。㈨ 設備掛　場内の御通路，天幕，便所，其の他諸般の設備に関し，予め関係諸掛と連絡を保ちて適当の方法を構じ，其の整備，監督に当るものとす。㈩ 救護掛　競技場内に於ける救護掛と予め連絡を取り，当日の救護の連絡，補助等に当るものとす。[4]」

（３）開会式と奉迎式

こうして昭和４年10月27日から８日間，第５回明治神宮体育大会が開催されたが，天皇は，10時に到着し，その後の行動は次の予定で行われている。

「○総裁宮殿下は玄関まで御出迎遊バサレ，奉迎の後陛下に従はセラレ，定メノ御席に着かせられる。陛下の右方少しく後方とす。○名誉会長は奉迎式場選士の中央前に位置して奉迎す。○副会長は玄関前に奉迎して後御先導申し上げ。○各国務大臣，宮内次官，文部次官，文部参与官は玄関前に奉迎して後，扈従す。○大会顧問及各部顧問は，所定の位置に在りて奉迎す。○奉迎部役員及所属の部なき役員は，新聞記者席の前の両側に整列して奉迎す。○指揮者は会長と役員と選士の中央に位置す。○役員中任務のある者は，其任務に必要なる位置に在るものとす。○皇族係は，皇族随員の後方に在るものとす。○各部役員は其部選士の右翼に位置す。○選士は掲額の順序。(中略)○各部は側面縦隊に整列す。一列二十五名とし，其数を越ゆるときは列の新を増す。○所属なき役員並に服装に於て列に加はり得ざる役員（フロック又はモーニング以外の服装の者）は，役員席にありて奉迎す。○皇族方は，玄関内玄関に向って右側に於て御出迎遊ばされし後，扈従して，定の席に着かせられる。皇族殿下方は皇族係御案内申上ぐ。○一般参観者は其位置に於て玉座に面して起立し奉迎す。○御着席前合図により一同玉座に面し起立して奉迎す。(中略)○御着席　副会長の御先導により陛下，総裁各宮殿下，従者の順序にて臨御[5]」

また奉迎式は「一，君ケ代奏楽裡に臨御　○君ケ代は軍楽隊奉奏し，一般は之に合唱せざるものとす。○陛下玉座に着かせ給う時，君ケ代を奏し終わる如くに奏するものとす。○楽隊は選士の前の位置にあるものとす。○儀礼係の一名は奏楽の合図をなすものとす。二，役員選士及び一般参観者最敬礼をなす。○石川総務委員の指揮によるものとす，役員選士最敬礼し，参観者は之に倣ふ。三，奉迎文捧読。四，一同最敬礼　○指揮者指揮す。五，万歳三唱　○名誉会長の発声により万歳三唱。六，陛下御着席。七，会長役員選士の順序にて退場，この間奏楽す(中略)。○役員は，中央より右向し，左は左向して退場す。選士は指揮者の指揮に従ひ，評議委員に引率せられ，中央より

右は右の方に，左は左の方に，各部中央に近き部より退場する[6]」というものであった。

こうして行われた開会式の模様を『報告書』は，「本大会の各競技は本日より一斉に開かるゝに当り，午前九時より神宮外苑野球場にて開会式が行われた。前夜来の強雨は名残なく晴れて，清気は外苑一体に満ち，一碧拭へる如き大空の輝かしさ。全国より集まれる各競技の代表選手八千並びに各競技役員は，正面スタンド貴賓席前に整列すれば，軈て定刻モーニング通常礼服にシルクハットを召された秩父総裁宮殿下には前田事務官を随へて御来場。井上名誉会長，平沼副会長，小橋文相等に出迎へられて貴賓席に入らせられた。突如嘲喨たる君ケ代の奏楽が陸軍戸山学校軍楽隊によって奏せられ，軽いリズムを朝の大気に伝へると平沼副会長進みて開会の辞を宣した。総裁宮殿下には正面の席，左記要旨の優渥なる令旨を賜ったが，音吐朗々その声咳に接する選手役員は自ら頭を垂れた。総裁宮殿下の御雄弁なるに感激せざるものはなかった。見よ，美しく澄わたれる秋空隆々たる筋骨叩けば鏘の音も発せんが，我国代表選士，諸子，而して上に戴く総裁宮殿下の御英姿，御態度の颯爽たる様，之れ将に昭和聖代の御代にふさわしい情憬であった[7]」と伝えている。

ところで大会会長の秩父宮は，「本大会ノ回ヲ重ヌルニ従ヒ盛大ニ赴クコトハ真ニ慶賀スル処デアリマシテ，是レ特ニ其設立趣旨ノヒルイナキト，麗ハシキ国民精神ノ発露ニヨルニ他ナラヌト思フノデアリマス。然ルニ本年ハ畏クモ天皇陛下ノ行幸ヲ辱ウスルコトニナリマシタノハ独リ本会ノ栄誉ノミニ止マラズ，我国体育界ニトッテノ空前ノ盛事デアリマス。諸君ハ全国ノ代表者トシテ明治神宮ノ神前ニ於テ，且天皇陛下ノ御前ニ於テ平常鍛ヘタル運動精神ト磨ケル技倆トヲ発揮スルノデアリマシテ，実ニ無上ノ誉デアリマス。此光栄ヲ坦ヘル諸君ノ奮闘ニヨリ本大会ガ良好ナル成績ヲ収ムルノミナラズ，我運動競技界ガ更ニ向上ノ一躍ヲナサンコトヲ切望スルノデアリマス[8]」と述べ，また名誉会長井上準之助は，「奉迎文」のなかでこう述べている。

「本日第五回明治神宮体育大会ノ開催セラレルニ当リ，畏クモ天皇陛下ノ行幸ヲ添シ，颯爽タル御英姿ニ咫尺シ奉リテ，日頃鍛練ノ技ヲ競フノ光栄ニ浴シタルニ，洵ニ聖代ノ盛事トシテ唯々感激，恐懼ニ堪ヘヌトコロデアリマス。熟々惟ミルニ，天皇陛下国務御多端ノ折カラニモカゝハラセラレズ，本大会ニ行幸アラセラレタルハ，畏クモ汎ク体育御奨励ノ思召ニ出デサラレタルモノト恐察シ，我ガ国体育界ノ光栄之ニ過ギタルモノナシ。此ノ有難キ聖旨ヲ拝シ奉リ，臣等体育界ニ身ヲ置クモノノ責任ノ愈々重ク，且ツ大ナルモノアルヲ切ニ感ズルモノデアリマス。本大会ニ於テモ今ヨリ一層碎励，協力シテ，明治天皇ノ御遺徳ヲ顕揚シ奉リ，併セテ国民体育ノ振興ヲ図ルノ本旨ヲ体シ，益々奮闘シテ良好ナル成績ヲ収ムルノミナラズ，我ガ運動競技会ノ更ニ進展ノ一躍ヲナサンコトニ努メ，優渥ナル聖旨ニ沿ヒ奉ランコトヲ期シテ止マヌモノデアリマス。臣等此ノ光栄ニ浴シ，抃舞自ヲ禁スル能ハズ。謹シンデ奉迎ノ誠ヲ輸シ，聖寿ノ万歳ヲ頌シ奉ル[9]。」

また浜口首相は，「茲ニ総裁秩父宮殿下ノ台臨ヲ仰ギ，本日ヲ以テ第五回明治神宮体育大会ノ開会式ヲ挙行セラレ，日本各地ニ於テ選抜サレタル青年男女諸君ハ，今後八日間ニ亘リ明治神宮外苑ヲ中心トシテ水陸各種ノ運動競技ニ精進セントス。洵ニ我ガ体育界ノ盛事ニシテ，予ノ哀心ヨリ欣賀ニ堪ヘザル所ナリ。惟フニ健全ナル精神ハ健全ナル身体ニ宿ル。運動競技ハ其ノ目的トスル所身体ノ発育ヲ図ルニアルノミナラズ，之ニ依ツテ奮闘，忍耐，勇気及克己ノ精神ヲ涵養シ，以テ品性ヲ陶冶シ，人格ヲ完成スニアリトス。殊ニ本大会ハ明治大帝ノ御遺徳ヲ景仰シ，之ヲ顕彰スル為創製セラレタルモノニシテ，其ノ意義ヤ極メテ深ク且ツ大ナリ。而シテ今回ハ畏クモ聖上陛下ノ御臨幸ヲ辱フセントス。聖慮寔ニ感佩ニ勝ヘズ。冀クハ当局有司竝ニ関係各位ハ思ヲ此処ニ致サレ，本大会ヲシテ能ク所期ノ目的ヲ達成セシメ，以テ国民精神作興ニ資セラレンコトヲ一言所懐ヲ陳ベ以テ祝辞ト為ス[10]」と述べ，小橋文相は，「顧フニ国運ノ隆昌ハ元気旺盛，体力強健ナル国民ノ力ニ俟ツ。

体育ノ一日モ忽ガセニスベカラザルハ，是レ啻各人身心ノ修養鍛練上緊要ノ事タルニ止マラズ，実ニ国家存立上ノ一大要鍵タルニ，幸ニ近時我邦ノ体育運動ハ之ニ関スル施設ノ整備ト国民ノ自覚トニ依リ，全国致ル処年ヲ逐フテ顕著ナル発達ヲ遂ゲ，明治神宮体育大会亦回ヲ重ヌルニ随テ益々隆益ヲ加フルヲ見ルハ邦家ノ為慶賀ニ堪ヘザル所ナリ。畏クモ天皇陛下ニ於カセラレテハ国民体育奨励ノ思召ヲ以テ，来ル十一月一日本大会ニ行幸アラセラレルベキ旨仰セ出サル。寔ニ是レ体育界無上ノ光栄ニシテ，殊ニ体育ニ従フ者ノ責任ヤ愈々重キヲ加ヘタリト謂フベシ。謹ンデ案ズルニ本大会趣旨トスル所ハ明治天皇ノ御遺徳ヲ顕揚シ奉リ，併セテ国民体育ノ振興ヲ図ルニ在リ。本大会参加ノ諸君能ク此ノ旨ヲ体シテ終始公明正大ノ態度ヲ持シ，益々運動本来ノ精神トスル所ヲ発揚スルニ努メ，以テ聖旨ノ優渥ナルニ答ヘ奉リ，下ハ以テ範ヲ一般国民ニ示サレンコトヲ望ム[11]」と祝辞を述べている。

（４）マス・ゲームによる動員と大会風景

こうして開催された競技大会の様子は，『報告書』によると次のように描かれている。

「十月二十八日　快晴である。外苑競技場では府下西巣鴨六校の連合女生徒三百名が戸山学校軍楽隊につれ，渡辺彦太郎氏指揮の下に美しきフラワーダンスに呼物の体操は開始され，次いで東京市立第一中学校生徒六百名が白帽子に白のユニフォーム，黒のパンツで岩崎太郎氏の指揮により勇壮極まる体操，東京女子体育専門学校百四十名は二階堂トクヨ女史のリーダーで体操，ダンスから童謡，旅行進に移って美しさ眼を奪ふばかり。この場面に観衆は大喝采を浴びせた。次いで二時から開かれた関東代表法政大学対東海代表静岡高校クラブのア式蹴球予選は両軍の技倆伯仲して大接戦を展開し，延長戦に入るも勝負つかず，抽選の結果静岡高は武運拙なく，法政に勝を譲って涙を呑んだ。各所の庭球戦は愈々白熱し，殊に女子軟庭ダブルス戦はこの日早くも決勝ちに入り，奇しくも鹿児島錦江高女対熊本第一高女の双方九州同士の争覇となったが，鹿児島遂に凱歌を奏し，本大会最初の優勝者となった。一方大久保射撃場で行はれた射撃競技は学生の部で東京商大優勝し，在郷軍人では朝鮮大邸の近藤君が一位を占めた[12]。」

「十月三十一日　午前中の花ともいふべき競技場に於ける男女学生の籠球，排球競技で好天気に恵まれて，観衆も本大会におけるレコードを破り，スタンドの両側に陣取った応援団からは絶えず可憐な声援が起って素晴らしい光景を呈した。この日からはじまった剣道競技は，午前八時から日本青年館に『ヤー』『オー』の懸け声も勇ましく，大小の剣士入乱れて必死の奮闘を続け，また内苑弓場では弓道競技の火蓋が切られた。庭球競技は愈々佳境に入り，更に一方尾久の新コースに於ては華やかなボートレースが開始された。角力場の拳闘競技は進んで準決勝に入り，かくて今や水に陸にスポーツの粋は展開され，天皇陛下晴れの行幸を明日に控えて選手の意気は沖天の慨を示している。この日全国青年団代表八百余名は午後一時日本青年館に集合，打合せを行った上一同隊伍を整へて明治神宮に参拝し，武運を祈った。（中略）剣道に於ける少年剣士の鮮やかな試合振りは『武士道国』の名に恥ぢず，尾久のコースに於けるボートレースが秋のかもめを驚かした。中等学校軟球決勝では群馬県の太田，前橋の両中学が図らずも，同県を以て雌雄を決することゝなり，前橋武運拙なく敗退したが，自分等の県が優勝の栄冠を獲得したことを祝福するの美しい場面を見せた。かけていよ〳〵晴れの天覧競技に入ることゝなった。国を挙げてのスポーツ週間は正にその最高潮に達した観がある[13]。」

天皇は，「十一月一日午後一時再び御出御になり，陸上競技，排球，籠球，ホッケーを展覧になり，午後二時全員起立最敬礼の中に玉座を立たせられ，自動車に召されて相撲場にならせられた。

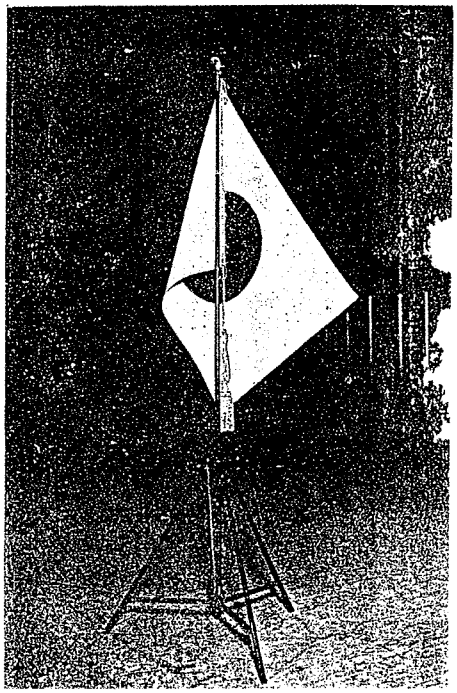
相撲場では筋肉隆々たる青年団選手が裸体のまゝ整列。(中略)陛下には正面テント張の玉座にゐらせられ，青年団相撲を天覧になったが，兵庫県選手対山梨県選手の勝負からは玉体をお乗出あらせられていと熱心に御覧になり，殊に鹿児島県選手は長野選手を見事に叩き込んで勝ち名乗を受けた時には御満足気に御笑ひ遊ばされた。相撲天覧は僅か十五分であった。殊の外御気に召された様に拝された。二時二十七分陛下御立ちの際には全員が起立して万歳を三唱して奉送した。かくて午後二時三十分野球場に御臨場あらせられた。早慶両軍はホームプレートを中央に縦隊に整列。選抜いた中学選手もその左右にならび，聖上御着の際には池田塁審の号令で全観衆と共に最敬礼を行った。二時三十五分早慶野球戦は慶応の先攻によって開始されたが，秩父宮殿下には一々陛下に御説明遊ばされ，陛下にも御興味深げに展開されていく白熱戦を御覧になり，第三回慶軍が一挙五点を獲得してすさまじき応援団の拍手が起るや，陛下には御微笑をもらし給ふ位であった。かくて御予定の時刻を二十分あまりも過されて三時二十二分還御あらせられた。選手及び観衆は再び最敬礼を行ひ，万歳を三唱して奉送しあ[14]」という。

ところで，『報告書』によると，この大会の集団体操ならびにマスゲームに参加した学校，生徒数，指導者は14,227名，またこの大会に参加した役員，選手の数は25,589名に及んでおり，これに各会場の観衆の数を加えるならば，実ち推定数約10万人以上が動員されていると見られる。

2．満州事変の勃発と奉納主義の確立

(1) 第6回大会と「聖恩之旗」の設置

関東軍の謀略によって，昭和6年9月柳条湖で南満州鉄道が爆破され，中国軍と交戦となった。これが，以後一五年戦争に突入することになる満州事変である。この満州事変の勃発により，神宮大会は，その皇道主義，国体主義をより一層濃厚にしていくが，それを象徴的に物語るものは，今日の天皇杯に相当するとも言える「聖恩之旗」(＝日の丸の旗)の創設である(資料―25参照)。



資料―25　　聖 恩 之 旗

『報告書』は，「畏くも天皇陛下には体育御奨励の思召を以て昭和四年十一月一日第五回明治神宮体育大会に行幸遊ばされ，明治神宮外苑各競技場に行はれた各種競技を最も御熱心に天覧遊ばされた。

之実に本会無上の光栄たるのみならず，本邦体育界の栄誉之に過ぎたるものなく，洵に聖代の盛事として感激，恐懼に堪へざるものあり。

本会は之が光栄を永に記念すると共に，此優渥なる聖旨を奉戴して我が運動競技界の進展の為，一層の砕勤協力を誓ふ事とし，宮内当局と協議の結果，御下賜金を以て国旗を謹製し，名付けて『聖恩之旗』と命じ，今回第六回大会を開催するに当り，入場式に選手代表之を捧持して役員選手の先頭に立ち，又順次各競技場に奉掲して聖恩の有り難さを銘記せしめた。

旗　生地別織　瀬上等単，縦三尺横四尺三寸，日の丸

径一尺八寸，赤色堅牢染抜き　旗　竿　割竹六本組合せ，蠟色塗長八尺五寸五分，石突銅輪金及銀鍍金　旗　頭　黄銅台金鍍金三寸五分球型[15]」と記録している（資料―25参照）。

この６回大会でも秩父宮を再び大会総裁として開催されているが，『報告書』には「第六回明治神宮体育大会開会に当り，昭和六年三月七日の評議委員会に於て秩父宮雍仁親王殿下を重ねて総裁に仰ぎ奉る事に満場一致之れを可決し，御内意を伺ひ奉りたるに軍務の為，大会開催中行啓遊ばされ難き旨の御内沙汰ありたるも，同年七月十五日会長坂谷芳郎男より奉戴方願出たる処御快諾の旨正式の御通達あり。同月二十一日の評議委員会に之れを報告して，其の重ねての光栄に一同歓喜した[16]」とある。

（２）開会式の絶対主義化

大会は，10月２日から既に水泳競技が新設された神宮プールで実施されているが，開会式は午前10時から行われ，君が代斉唱の後，阪谷会長の代理として河本禎助が式辞を代読している。

「第六回明治神宮体育大会ノ第一期トシテ水上競技大会ヲ開催スルニ当リ，全国各地カラ選抜セラレマシタ代表選手諸君ヲ迎ヘ，ソノ発会式ヲ挙行致シマスコトハ我等ノ哀心欣幸トスルト所デアリマス。惟フニ国運進展ノ基礎ヲナス国民精神ノ作興ハ現下ノ急務デアツテ，之カ遂行ノ一ニシテ足リマセヌカ体育競技ヲ振興シ，国民体位ノ向上ヲ図ルト共ニ公明正大ノ気象ヲ涵養シ，剛健質実ノ運動精神ヲ発揮スルコトハ，蓋シ最モ適切ナルモノト思フモノテアリマス。本大会ハ明治大帝ノ御懿徳ヲ憬仰シ奉リ，之ヲ顕彰スルト共ニ，絶ヘス，普ク，正シク，国民ノ身心ヲ鍛練スル為ニ設ケラレタモノデアリマシテ，回ヲ重ネル毎ニ限リナキ進歩ヲ遂ケ，就中水上競技ニ於テハ正ニ世界ノ視聴ヲ集メ，断然優秀ナル成績ヲ以テ国民ノ矜恃ヲ高クシ，国威ヲ中外ニ宣揚シツゝアリマス。吾等ハ更ニ自重ヲ加ヘマシテ規程ヲ格守シ，秩序ヲ保持シ，堂々全力ヲ挙ケテ技ヲ競ヒイテ，本競技場ヲシテ実社会ノ典型的訓練場タラシメタイト思ヒマス。特ニ内外多事ナル奉家ノ現状ニ鑑ミマシテ，本大会ノ使命ハ愈々重大ナルヲ通感致シマスノデ，開会ノ初メニ当リ切ニ戦士諸君ノ自重ト発奮ヲ祈ルト共ニ，関係各位ノ協力ヲ得テ大帝照鑑ノ下ニ一段ノ活躍ヲ期シ，国家ノ期待ニ副フヤウ精進シタイト思ヒマス。終リニ臨ンデ本大会計画ノ任ニ当ラレマシタ役員各位ハモトヨリ，官民各方面ノ誠意アル御声援並ニ各地予選会ノ斡旋者ニ対シ謹ンテ感謝ニ意ヲ表シマス[17]。」

かわって中川文部次官が「天高ク気爽ナル候，第六回明治神宮体育大会ノ開催ヲ見，全国各地ヨリ簡抜サレタル水泳選手輩轂ノ下ニ集リ来リテ，其ノ競フ直ニ会心ノ壮挙ト謂フベシ。殊ニ競技ノ場所ハ神宮外苑ノ『プール』ニシテ実ニ今夏ノ新営ニ係リ，規模ノ大ナル設備ノ完キ東洋一ト称セラル。選手諸子ノ意気ヤ想ヒベク龍虎覇ヲ争フノ壮観察スルニ余リアリ。抑競技ハ読ンデ字ノ如ク技ノ優劣ニアリ。然レドモ優劣勝敗ヲ超越シテ貴ブベキハ其ノ精神ノ純真ニシテ，其ノ態度ノ公明ニアルコトヲ忘ルベカラズ。多年鍛練ノ功ヲ積ミタル選手諸子ニ対シテハ素ヨリ一片ノ杞憂タルニ過ギザルベシト雖モ，開会ノ初ニ当リ一言婆心ヲ添ヘテ祝辞ニ代フ[18]」と田中文部大臣の祝辞を代読している。

本大会（秋季大会）の開会式は10月27日に行われているが，秩父宮は，「本大会ハ特ニ明治節ヲトシ，神宮ノ大前ニ於テ挙行セラレルゝ点ニ深甚ナル意義ヲ有ス。諸君ハ宜シク日頃錬磨シタル身体技術ヲ通シテ大ニ競技精神ヲ発揮スルニ止マラス，進ンデ新日本ノ国運ヲ双肩ニ荷フノ国民的意気ヲ示サザルベカラズ。余ハ親シク場ニ臨ム能ハズト雖モ，諸君ガヨク本会設立ノ主旨ヲ体シテ，之ガ貫徹ニ遺憾ナカランコトヲ信ズ[19]」と挨拶し，また副会長平沼は，会長阪谷の式辞を代読しているが，内容は水泳競技の開会式のほぼ同様であるので割愛する。

これが終わると，「聖恩之旗」が榊原選手から平沼副会長に返還され，さらに若槻首相（山桝秘書官代読）は，「凡ソ運動競技ノ目的タルヤ身体ノ発育ヲ図ルト共ニ奮闘，忍耐，勇気，克己等ノ精神ヲ涵養シ，以テ品性ヲ陶冶シ，以テ人格ヲ完成スルニアリ。明治神宮体育大会ハ日本ヲ以テ其ノ第六回開会式ヲ挙行シ，爾後八日間全国各地選出ノ青年男女，水陸各種ノ運動競技ヲ行ハントス。

是レ洵ニ我ガ体育界ノ盛事ニシテ，邦家ノ為メ欣慶ニ堪ヘザルナリ。抑々本大会ハ明治天皇ノ御偉徳ヲ憬仰シ，之ヲ顕彰シ奉ル為メニ創設セラレタルモノニシテ，其ノ意義ハ極ワメテ深ク且ツ大ナリ。冀クハ関係者各位克ク此ノ点ニ思ヲ致シ，本大会所期ノ目的達成ニ盡瘁シ，以テ国民ノ体育向上ト精神トニ寄与セラルルアランコトヲ一言以テ祝辞トス[20]」と述べている。

（3）満州事変下の大会

これらの挨拶が終わると同時に，『報告書』は，「各競技部役員，男女選手三十余名は明治神宮参拝の為退場し，一同は河本総務委員の合図で明治神宮を遥拝し，かくして十時三十分厳粛なる開会式[21]」を終了したが，「直に成城女子部対東京女子大学のホッケー戦に入り一時間の熱戦は成城女子部に上った，日本体育会体操学校，本郷中学，東京女子体操音楽学校，東京基督教青年会等のマスゲーム，一群の筋肉の躍動，人間のピラミッド，バンドにつれて舞ふ白衣短袴の舞踊体操等々，観衆は悉く統制ある集団の律動美に酔ふ。午後一時呼物の学生対一般の対抗陸上競技は開始され，織田幹雄君は三段跳に十五米五八，南部忠平君は走巾跳に七米九八の世界新記録を作って我日本陸上競技史上に不朽の光輝を止め，満場起立裡に『君が代』は奏せられ，更に日本新記録三と日本タイ記録三を出して，明治大帝の英霊の大前に技を競ふにふさはしい息詰まるやうな猛烈な競り合いが演ぜられた。一方上井草，早大，御茶の水の四個所のコートでは男子硬式シングルス，又戸山学校コートでは郷土の名誉と期待とを背負って女子軟式シングルス戦は行はれ，青年日本の意気と力とを示す。その往昔の希蠟のオリンピック大祭に比すべきスポーツカーニバルは次第に高潮して行く[22]」と記録されている。

ここには，不思議と満州事変という危機意識は微塵も見られず，そうした時代感覚は，郷土主義への埋没と喧騒によってかき消されており，その意味からも天皇制国家の政策的意図は成功していたと言えるだろう。その後の競技風景が，如実にそのことを物語っている。

「十月二十八日　織田，南部の世界的飛躍に続く第二日は朝来朗かな小春日和である。澄み渡った秋空の下に『聖恩之旗』は秋の陽を受けて外苑競技場スタンドの正面にかゞやく。此の日戦端は先づ午前九時巣鴨帝大コート，御茶の水コートに切られ，硬球男子ダブルスにジュニア，シングルスに華やかな旋風を捲き起し，戸山学校コートでは全国高女の精鋭が軟式女子単複戦に母校の名誉を其熱球に賭けて戦ふ。外苑競技場では午前九時五十五分の北大対名高商のホッケーに続いて日本体育会体操学校女子部の円舞，攻玉社中学校の近代的な野球体操の後，蹴球の全日本選手権大会第一回戦に入り，果然スタンドはサッカー，ファンで賑ひ，熱戦又熱戦，観衆は熱狂と昂奮に湧き立った[23]。」

「十一月三日　『聖恩之旗』を捧げて開会を宣してより八日間，連日快晴に恵まれて満都の明朗な興奮を捲き起こしつゝ総観覧三十万，未曽有の盛況の裡に菊花の香りも高き明治の佳節を最後に，総決算の日を迎へた。第八日は外苑をこめる朝霞の晴れやまぬ内から人波が渦巻く，午前八時既に日本青年館には優勝を競ふ，烈しい剣士の気合いの声が響き渡り，競技場にホイツスルが高鳴れば紅白のユニホーム乱れ飛ぶＯＢ紅白戦に観衆は湧き立つ。オリンピック予選の器械体操には賛嘆の声上り，（中略）男女，一般陸上競技選手の活躍はマラソンに，女子の八百に，砲丸に日本新記録を

出すの盛観を呈した。野球場では広島商業対広菱中学，早大対立大の決勝戦にスタンドの声援を捲き起せば，相撲場では拍子木の音神宮の森にこだまして，力士選手権の好取組は好角フアンを陶酔に導く。墨堤の向島コースではフォア，シエル，固定席艇の全日決勝戦に海軍の対抗カッターフアンの興奮をわき立たせ，内苑に響く弓弦の音にも決勝戦の烈しさを思はせ，古典と近代のスポーツの総動員の万華鏡も昭和青年最後の活躍を写し，幾多の華やかな収穫を残してスキー競技のみを除く本大会も目出度く茲に閉会を宣した[24]。」

なお，この秋季大会の参加者は，11,048人である。

３．事変下の第７回大会

（１）秩父宮の大会総裁就任

第７回大会も，昭和７年９月30日から水上競技をもって開催され，６回大会と同様に秩父宮を総裁にすえている。その経緯は，「明治神宮体育会では第七回明治神宮体育大会開催に関し，昭和八年初頭以来準備を進めて居たが，四月文部省内に事務所を移転し，四月十四日日本工業倶楽部に開催された評議委員会に於て総裁に秩父宮雍仁親王殿下を奉戴するに決し，大会期日並に各競技部の大体の計画を可決し，会長坂谷芳郎男より秩父宮家に奉戴願出たる処，左の如き御承諾の御通達があった。（中略）

明治神宮体育会会長男爵阪谷芳郎男殿　雍仁親王殿下を第七回明治神宮体育大会総裁に奉戴致度旨御願出相成候処御承諾被在候条此段申進候也[25]」というものであった。

こうして７月19日，日本青年館において開催された評議委員会で大会予算を承認し，ボクシングの復活，ヨット部の新参加を認めて大会の計画は全て成立し，開催されている。『報告書』は，「畏くも総裁秩父宮雍仁親王殿下御親裁の下に明治神宮外苑競技場を中心に市外各所並に栃木県日光，新潟県小千谷に於て華々しく開催された。会期中天候に恵まれ，総ての計画は予定以上の成功を収め，所期の目的を充分に果たす事の出来たのは之れ偏に明治大帝の御遺徳の然らしむる処と深く感銘する次第である[26]」と記し，また10月27日に各種競技の開会式が開催されている。

「非常時日本の秋，若人の意気を高らかに誇るスポーツの豪華版。第七回明治神宮体育大会の本競技は十月二十七日から菊花香る明治節の十一月三日までに亘り明治神宮内，外苑を初め，市内外の各競技場に於て華々しく開催された。夜来の雨霽れて秋空一碧ふが如く，神苑秋色濃やかな二十七日午前十時全日本各種スポーツの精鋭一万二千余を集め，明治神宮外苑競技場に盛大な開会式は挙行された。清々しい秋気，適当に湿ったトラック，クッキリとした白線，その上をふみしめつつ海軍軍楽隊の『軍艦マーチ』に合はせて，四列縦隊に組んで千駄ケ谷駅寄口から役員選手は颯爽と式場に入場して来た。先頭に『聖恩之旗』が秋の陽に燦と輝いて，光栄の旗の捧持者成城高等学校籠球選手松井聡君の張り切った顔が見える。その護衛を承る逗子ボート倶楽部の西園寺美代子嬢，静水会端艇部の八島作衛君，続く選手代表東京高等師範学校籠球選手佐々木久吉君，平沼副会長以下役員，各部旗を掲げた（中略）

二十二競技，男，女，軍人，警官選手の堂々たる歩武，これ実に青年日本の一大示威行進である。スタンドに湧き起る拍手の波，之れに和して帝国飛行協会の芝谷一雄飛行士は爆音高く式場の上空を低空飛行し，各新聞社の飛行機も之れに加はる。来賓席の中島商工大臣，英国大使，丁満州国公使，チエツコ公使などが熱心に日本若人の威力に見入る。トラックを半周してスタンド正面に一同整列し，総務委員宮木昌常開会を宣すれば，中央大学庭球部中垣美好君，女子体育専門学校庭球部松崎せい子嬢は正面ポールに進み，国家吹奏裡に国旗は掲揚され，君ケ代の斉唱に移ると共に芝生

席側のフヰールドから一千羽の伝書鳩が放され，五色のテープをひいて青空に乱舞する。大演習の為，福井県地方に御成中の総裁秩父宮雍仁殿下の令旨を副会長平沼亮三氏が謹んで捧読すれば，会長坂谷芳郎男は壇下に待立する[27]。」

秩父宮は，「本大会カ特ニ明治ノ佳節ヲ選ヒ，神域ニ於テ挙行セラルヽ所以ノモノハ，競技精神ノ作興ヲ念トスルニ因ル。今ヤ我国競技ノ声愈々揚リ，之カ選手タルモノノ地位益々向上ヲ致シツヽアルハ世ノ認ム所ナリ。諸子ハ応ニ運動ノ真意義ヲ体得シ，国家多事ノ此ノ秋ニ於テ国民ノ一員トシテ新日本ヲ雙肩ニ擔フノ覚悟アルヲ要ス。予ハ今日親シク此ノ式ニ莅ム能ハスト雖モ，語ヲ寄セテ諸子ノ奮闘ヲ希ヒ本会素志ノ貫徹セムコトヲ望ム[28]」と述べている。

続いて斎藤首相（山川文部省体育課長代読），山本内相（潮次官代読），鳩山文相（栗屋次官代読）等が祝辞を述べているが，例えば鳩山は，「秋高ク馬肥エ，金風颯トシテ爽気人ニ逼ル是ノ時ニ当リ第七回明治神宮体育大会ノ開カルヽアリ，男女一万ノ選手全国各地ヨリ集リ来リ満ヲ持シテ未ダ放タザル処，辱クモ総裁宮殿下ノ令旨ヲ奉シ，満場粛トシテ森厳ノ気外苑ニ張ル。時局多難，挙国振張ノ秋此壮挙ヲ見ル。真ニ欣快ノ至ニ堪ヘズ。惟フニ公明正大ノ精神ハ運動競技ノ体ニシテ百折不撓ノ意気ハ其ノ用ナリ。体用竝ビ行ハレテ必勝ノ勢始メテ生ズ。之ヲ早木譬フレバ，精神意気ハ根幹ニシテ勝敗，輸贏ハ華実ナリ。其ノ根幹ヲ培ハズシテ，徒ニ華実ノ美ヲ追フハ決シテ運動競技ノ本旨ニアラズ。是レ多年ノ修練ノ功ヲ積ミタル選手諸君ノ既ニ十分獲得セラレタル所ナルヲ信ズト雖モ勢ノ激スル所低キニ就クベキノ水反リテ，或ハ奔騰逆流ス。諸君庶幾クハ深ク心底ニ留メ正々堂々ノ陣以テ優秀ノ美ヲ済スニ努メラレンコトヲ」と祝辞を述べている。そして「臨席の中島商工大臣は自ら壇上に進んでスポーツに涵養された精神と体軀を以て，明治大帝の御前に演ずる此明治神宮体育大会の意義あるを礼賛して次期国民の発奮を求め[29]」ているが，その後の風景は，次のようなものであった。

「終って各競技役員，男女選手代表六十余名は大会開催を奉告する為，総務委員岩原拓氏に率ゐられて明治神宮参拝に向ひ，一同遥に明治神宮を遥拝し聖恩の旗を正面役員席に安置すれば宮木総務委員閉会を宣し，軍楽隊奏楽裡に一同退場して十時四十五分芽出度開会式を終った。麗かな秋日和に母校の名誉，郷土の誇の為に戦ふ若人達の熱戦又熱戦に，早くも初日から大会気分は急速度に濃度を増した。外苑競技場では開会式後，直ちに行はれた東京府中学校二十三校二千七百余名のマスゲーム，日本体育会体操学校男子部五百名，女子部百五十名の体操に続いて女子ホッケー戦に成城ＯＧが一対零で女子大を一蹴して全日本選手権を獲得し，北大対名古屋高商の試合は北大にとっては前回の雪辱戦。遂に三対一で北部に揚り，蹴球の第一回戦は関西代表関西学院対北陸代表富山師範の組合せ，対局六対一で関西学院に栄冠は握られ，次の関東代表東京ＯＢ対北海道代表函館籠球団の一戦もお膝下の東京ＯＢの勝利に帰す[30]」

「十月三十一日　前日の雨名残なく霽れた第五日，天あくまで高く清澄の気神苑に溢り，かゞやかしい体育日本の遼々たる前途を祝福して居るやうだ。総裁秩父宮殿下には妃殿下同伴，午前九時四谷第六小学校の卓球場へ成らせられ，続いて日本青年館の柔道，外苑野球場の新人野球，正午には競技場へと順次台臨遊ばされた。此の日から待望の野球と陸上競技が序開きされ，正九時神宮野球場では帝大を除いた五大学に日大専修を加へた七大学の新人と，全国からすぐり抜いた中等学校野球団の入場式が行はれた。(中略)国歌の吹奏裡に各主将の手により国旗掲揚の式があり，平沼会長は秩父宮殿下の令旨を奉読し，(中略)明治天皇の御遺徳を偲ぶ競技には総てが清浄化されて快いゲームが展開する[31]。」

「十一月二日　血湧き肉躍るスポーツ万華鏡に，非常時の秋を飾る大会も愈々あと一日となって，

七日目は各競技とも最後の力闘，血戦に大会の興趣と感激は将に絶頂となった。(中略)外苑競技場で午前中行われる筈であった籠球戦は芝生が乾かぬ為ＹＭＣＡに会場を移させ，男子一般準決勝で東京高師，成城高校勝残り，中等学校では長野商業，女子では新津高女が栄冠を得る。外苑競技場では午前十一時から非常時気分を反映した陸軍戸山学校の兵式体操が軍国的雰囲気を作る。二百四十名の軍人の半裸体の体操に筋肉美を誇っての後武装して進めの号令一下丈余の障碍物を乗越へ銃を擬して模造敵兵を撃つ手榴弾を投げる。軍刀を揮って稟馬の首を刎ねる。防毒マスク物々しく突激するといふ勇壮な応用体操に満場の観衆を喜ばす。中等学校のホッケー決勝戦に名古屋商業快勝の後，世界制覇を目蒐す陸上競技は開始された。(中略)フヰールドでは石津嬢がオリムピック選手の貫禄を見せて円盤に自己の保持する日本新記録を二米二七も伸ばして記録を更新し，伸び行く日本女性の意気を快いまでに吐く。男子競技も新進選手の活躍凄く続々好記録を確立し，輝く『陸上日本』の希望．強めて行く。日本青年館の剣道は在郷軍人の争奪戦で銃剣術は熊本の田口君，軍刀術は姫路の大倉君に栄冠輝き，神宮相撲場の青年団相撲は静岡の優勝となり，内苑の仮弓場では大学高専中等学校の雄が白熱戦を演ずる。(中略)此日午後六時から東京市主催の下に日比谷新音楽堂で『東京秋の夕』を催し，参加選手役員を招待した[32]。」

ちなみに，この大会に参加した選手役員は，総勢31,811人に上っている[33]。

４．第８回大会と奉納主義の浸透

（１）秩父宮の再度の総裁就任

第８回大会の秋季大会は，昭和10年10月29日より11月３日まで開催されているが，この大会でもやはり秩父宮を総裁に仰いでおり，その辺の経過を『報告書』を見ると，こう記されている。

「明治神宮体育大会は第八回明治神宮体育大会に就いて昭和十年七月十三日総務委員会を開き，其大体の方針を決定し，三月十三日の総務委員会に於ては期日短縮の計画を立て，之れが実行方法について議を進めた。六月七十四日並に七月三日の総務委員会に於て前回通り秩父宮雍仁殿下を総裁に奉戴するに決し，宮家の御都合を伺い奉った処，殿下には弘前連隊に御赴任遊ばされるので，大会に台臨遊ばされ難きを以て如何にやとの御内意があり，協議の末本会としては殿下台臨の如何に拘はらず，殿下を総裁に奉戴したいと満場一致之れに決定したので，更に宮家に願出たる処，御聴許あり，七月十八日附を以て左の如く達せられたので同日開催の評議委員会に報告し，一同拍手を以て之れを迎へた。(中略)かくて各部に於て準備委員，競技委員を選出して諸般の準備に万遺漏なきを期した[34]。」

なお秩父宮附宮内事務官前田利男の坂谷会長に対する回答文は，「雍仁親王殿下ヲ第八回明治神宮体育大会総裁ニ奉戴致度旨御願出相処，御承諾被為在候条此段申進候也[35]」というものであった。

また各種競技の開会式の模様について，『報告書』は，次のように報告している。

「明治大帝の御遺徳を偲び奉る昭和日本の一大オリムピア第八回明治神宮体育大会本競技は，輝く秋空の下聖恩の旗に栄へて愈々十月二十九日の開会式によって火蓋は切られた。古代オリムピックもかくやと思はれる全日本のスポーツダムは，神域明治神宮外苑を中心に遺憾なく其盛観を繰広げる。全国をすぐる精鋭一万二千が前回以来こゝに二春秋，郷土の栄誉を双肩にかけて，七日間，檜舞台で華々しい輪贏を決しやうとする選士の眉字に浮ぶ必勝の意気に凄まじいものがある。

大会の劈頭を飾る開会式は二十九日正午から秋風爽かな明治神宮外苑競技場に挙行された。此日（中略）午前十一時，役員選手一同は神宮水泳場から千駄谷駅前に至る歩道に整列した黒の学生服が大多数を占めているが，其中に庭球男女の白いユニホーム姿，軍人の多い馬術部のカーキ色，中

には女流選手のスマートな姿もあって，オール日本のスポーツマンの総動員だ。

正午競技場大時計の下のマラソン門がサット開かれるや，勇壮な軍艦マーチを吹奏する海軍軍楽隊のリズムも軽快に北海製缶倉庫缶友会漕艇選手箕輪正二君の捧持する聖恩旗を先頭に，庭球代表の楠，藤田両君に衛られ粛々として進み，数歩離れて選手代表仙鉄漕艇部佐竹貞臣君，大日章旗を捧持するホッケー部代表の浜田盛政君，之れを護てホッケーの西沢咲子嬢，本部役員を間に挟んで百驅揃ひの端艇部を初め庭球，ホッケー，水上，剣道と参加二十二競技部代表委員，選手「夫々部旗を押立てゝ蜿蜒の列を作って青年日本の威容を場内に撒きつゝトラックを半周すれば，スタンドから芝生から破れる許りの熱狂的拍手が起る。空からは海外同胞号を初め数機が奉祝の爆音高く，銀翼を輝かせて場内を大きく旋回してけふの盛儀を祝福する。(中略)中央スタンドの壇上には平沼副会長，岡田首相代理，松田文相，後藤内相，有馬明治神宮宮司，其左右に顧問，参与，総務委員，評議委員が居流れる宮木総務委員起こって厳かに開会を宣した。嘲喨たる『君ケ代』の奏楽にホッケー選手浜田盛政，藤野勝太郎両君によって正面芝生スタンドのポール高く国旗が掲揚されゝば，一同之れを仰いで国旗を唱和し，『聖恩之旗』を中央部に安置する。まさに感謝のシーンである。此時フヰールドの一遇から二千の伝書鳩が羽ばたきも勇ましく一斉に放たれ，秋空に舞乱して平和の瑞祥を漲らせる。平沼副会長は恭しく総裁秩父宮殿下より賜った令旨を捧読する[36]。」

その令旨は，「茲七第八回神宮体育大会ヲ開クニ当リ全国ヨリ来集セル選士諸君ニ告ク，本大会カ明治節ヲ期シテ神宮ノ大前ニ於テ挙行セラルルハ，特ニ重大ナル意義ヲ有スルコト夙ニ諸君ノ熟知セル所ナリ。宜シク平素鍛練セル心身ト洗練セル技術トヲ以テ，相競フヘク現下ノ世界情勢ヲ顧フテ将来国家ノ中堅トシテ国運ノ進展ニ貢献スヘキヲ期シ，十分ノ意気ト熱誠トヲ示ササルヘカラス。予今遠隔ニ在リ，親シク場ニ臨ミ諸君ト相見サルヲ遺憾トス。幸ニ能ク本会ノ主旨ヲ体シテ其ノ目的ヲ貫徹シ，完全ナル成果ヲ挙ケムコトヲ望ム[37]」と述べている。

続いて岡田首相の祝辞(松尾大佐代読)，松田文相，後藤文相，有馬神宮宮司等が祝辞を述べているが，岡田は，「国民ノ健康ハ国家興隆ノ素因ナリ。健全ナル精神ハ健全ナル身体ニ宿ルヲ以テ国民精神ノ作興ハ国民健康ノ増進ニ俟ツ所甚タ多シ。茲ニ全国万余ノ男女，聖恩ノ旗ノ下ニ相集ヒ，明治天皇ノ神前ニ於テ技ヲ競フ壮観ナリト謂フヘシ。今日第八回明治神宮体育大会ノ開会ニ当リ，大会ノ真意義ヲ真ニ深キモノアルヲ思ヒ，一言祝辞ヲ寄セテ出場ノ選手ニ告ク[38]」(松尾大佐代読辞)と祝辞を述べ，これらの挨拶が終わると「各部役員，男女選手代表は明治神宮参拝の為退場し，選手一同は神宮を遥拝して再び破れる許りの拍手裡に一同静々と退場して式を終わり，茲に七日間に亘るスポーツ豪華絵巻の第一頁は開かれた。(中略)開会式後一時から競技場では此日呼物である体操大会が始まる。千二百の小学校児童の可愛らしい徒手体操，女子体専の非常時日本の相応しい薙刀体操，筋肉美を見せた体操学校，裸姿の学童相撲体操，団扇太古に合わせた女子体操音楽学校，妙技を見せた器械体操団，ワイシャツに事務服姿の簡易保健局，花模様を描く三千六百の女子中等学校の徒手体操に，手留弾が飛ぶ，日本刀が振りかざされる戸山学校と何れもとりどりの特色を発揮した体操の躍動美に恍惚たらしめる[39]」と，『報告書』は，記録している。

（2）大会風景

その後の大会は，次のようなものであったという。

「十月三十一日　木曜日，秋空一碧の好コンディションに恵まれた第三日は愈よ高潮に，日本青年館の青年団対抗柔道では熊本五回連続優勝の覇業を成しとげ，個人決勝でも熊本の辻本五段が故郷に錦を飾る事となった。神宮球場では朝九時から中等，大学新人野球選手の入場式があり，前回の

覇者明大チームから銀製優勝バットが返還され，平沼副会長の始球式で開始甲子園の決勝で破れた強豪育英商業は，愛知商業に敗退し，専修は早大新人を破って五大学の為に気を吐き，戸塚球場では早実は岐阜商業に零敗し，日大は立名館に喰われる[40]。」

「十一月二日　連日明朗な競技日和に恵まれつゝ白熱戦を重ねて，愈よ第五日を迎へた一万三千の若人の意気と熱は外苑の空高く炸裂してスポーツ日本の賛歌の如く響き渡る。此日十一時半頃神宮外苑の空に二羽の鳩が現はれゆるやかに一周して飛去ったが，此端兆に一同厳粛な感激に打たれた。競技は何れも準決勝，決勝へと最後の争覇戦に移った。籠球は男子一般の準決勝に引続いて女子と男子の決勝が競技場中央で同時に行はれ，女子は京都府立第一高女，中等は朝鮮の崇仁商業が優勝する。之れが終ると入れ代ってホッケー地方対抗決勝戦に入り，関東軍に凱歌が上る。午後から全日本の血をたぎらした青年団対抗陸上競技最後の決勝と，来年度伯林オリムピック大会を控へての重大な全日本選手権大会も新に登場した。青年団対抗は全北海道チームが堂々四十点の大量得点をなし，前回二度の覇者鹿児島から優勝旗を奪回，四度目の制覇をなした。一般選手権では，五千米で関東の村社選手が一四分五八秒の大記録を出し，多年待望の一五分を割る日本記録を樹立した。暁の超特急，吉岡選手は流石に貫禄を示し，百米準決勝で一〇秒四の大会記録を出すなど，オリムピック遠征軍に更に強靱な力を加へた。青年団対抗相撲は大阪が団体，個人二つ乍ら神宮覇権を独占して青年団競技全部を終った[41]。」

「十一月三日　あさみどり澄み渡りたる大空の下聖戦六日興奮のるつぼにたゝき込まれた大会も，菊薫る明治の佳節を迎へて各競技共決勝に入り，若人力闘と大舞台の最後を飾るフィナーレが華やかに奏せられた。此の日午前十時明治神宮外苑絵画館の裏の広場では松田文相臨席の下に盛大な体操祭が行はれた。(中略)午後零時五十分マラソンのスタートで全日本陸上選手権第二日を開始，朝鮮の孫選手二時間二六分四二秒の世界最高記録。一万米では村社選手次いて又も三一分七秒八の驚異的新記録を樹立し，三千米障害では関東の今井選手が九分三一秒八の堂々たる日本記録を産む等，躍進スポーツ日本の力強い歩みは高らかに誇示された。(中略)

十一月四日　聖恩旗を捧げ持て，茲に七日間，開会以来無類の快晴に恵まれて，全国万余の精鋭が競った大会も愈よ最終日に入って，朝九時から競技場にオール日本の女性総動員の女子陸上競技選手権争奪戦が潑剌と展開された。(中略)来るべきオリムピックをめざして，北は北海道，南は台湾から馳せ参じた若き女性の意気込みも格別なものがあり，冒頭の砲丸投で早くも児島嬢が日本記録を破り，八百米継走で一，二位共日本記録を樹立し，槍投では山本嬢が神宮記録，五種競技では田中嬢が日本新記録を出す等目覚ましき活躍を見せて，男子三千米競争では奈良岡，和田，風間の三選手が揃って日本記録を出すなど，伯林へのホープを確実にした。かくて湧き返る興奮の波に午後五時大会を終り，直に閉会式に移り，粛条と降る冷雨の中で一同起立，厳かな君ケ代奏楽裡に中央ポールに掲揚されて居た日章旗は下され，全員空も割れよと叫ぶ聖寿万歳の三唱で大会を終った[42]。」

この大会には全日本体操祭への参加者を含め，選手，役員25.839名が参加している[43]。

15. 日中戦争の開始と明治神宮体育会の再編

1．国民精神作興と９回大会

（1）明治神宮宮司有馬良楠の体育会会長就任

昭和12年７月，日本軍が行方不明の兵士を捜索中に中国軍と武力衝突した。２日後，休戦協定が成立したが，近衛内閣は，防共と資源，市場確保のために「重大決意」，「挙国一致」の下に第２次上海事変から支那事変へと戦線を拡大させていった。この日中戦争の開始によって，神宮大会は，

大東亜新秩序建設の喧伝とともに，国体主義に加えて軍事色を強めていく。それは，明治神宮体育会会長に阪谷を退け，海軍大将で，明治神宮宮司でもある有馬良楠を新会長としたこと，さらに明治神宮体育会規約を有馬の意向により改正し，第 9 回大会の総裁に賀陽宮恒憲王を据えたことであった。そのことを『報告書』は，こう報じている。

「明治神宮体育会は第九回明治神宮体育大会開催に当り，昭和十一年十一月二日の評議委員会を最初に翌十二年二月三日には新総務委員並に主事を選び，六月十五日の評議委員会に有馬良楠閣下を推戴し，坂谷前会長を名誉会長に推し，有馬新会長の希望に依って本会の規約一部の改正を行ひ，又全会一致の希望たる総裁には賀陽宮恒憲王殿下を仰ぎたく，かねて願ひ出置きたるところ六月二十一日附を以て左の如く聴許あらせられた。

昭和十二年六月二十一日　　賀陽宮附　宮内事務官　宮野　安 明治神宮体育会副会長　平沼亮三殿 回　　答 貴会主催第九回明治神宮体育大会総裁ニ恒憲王殿下ヲ推戴致度旨御願出之件御丞諾被成候

かくて役員の全陣容整ひ，着々準備を進めつゝある時，七月に至り日支事変の突発あり。為にグライダー競技の中止，陸海軍現役の軍人の参加見合わせ等の事ありしも，関係役員一同は，よく時局の重大性と銃後国民の責めを感じて奮ひ起ち，国民精神の作興並に体育向上の為に，益々大会の内容充実に力め，左の日程の如く華々しくも亦厳粛なる大会を無事遂行し得たるは，偏に明治大帝の御聖徳による処と一同深く感激措く能はざる所であった。(中略)

第九回大会が事変下と云ふ特殊なる事情の下に開かれたる大会と云ふのみならず，種々たる点に於て従来の大会と異なれる諸点の見出す事の出来るのは特筆に値するものである。即ち先づ第一には，政府の補助金を三万円（従来は一万円）に増額され，入場料を全廃した事である。第二には，前記の如く現役軍人の不参加は致し方なかりしも，危ぶまれた地方青年団選手の出場は却って従来よりも多かりしは，全く明治大帝を憬仰する若人の心を如実に反映したものと見るべく，第三には，冬期競技を除き，東京に於ける諸競技に参加する役員選手全部が打揃って明治神宮の神前詣でゝ戦勝の祈願を行ひ，亦従来やりっぱなしの感ありし終了時に，今回は特に厳粛なる閉会式を挙行するなど．何れも国民精神作興の現はれである。第四には，自転車，送球，重量挙等の新種目が行はれたのはたとへ独立した種目でないものではあっても，オリムピック東京大会の近づきつゝあるを物語るものであった[44]。」

（2）第九回大会と戦勝祈願

こうして第 9 回大会の開会式が行われている。

「一部門に亘る各種競技は十月二十八日から八日間神宮外苑競技場，其他の競技場，演武場に於て行はれたが，参加人員実に二万二千二百名に，実に非常時銃後の守りを固うする若人の精神と身体との総動員である。競技に先立ち七日には，恒例により前回の優勝額奉戴式を午前十時に行ひ，同日午後三時からは青年団選手一同の明治神宮参拝を行った。即ち午後二時五十分日本青年館前に集合した五十四団体の選手，役員九百二十三名は十集団に分かれ，聖恩旗を先頭に各集団毎に都下少年団の喇叭鼓隊が行進譜を奏じ，陸上競技場広場にて香坂大日本青年団理事長査閣の下に分列式を行ひ，その間裏参道を明治神宮に進み，鳥居前に整列して国運隆昌を祈願し，更に遥に北支及び上

海の空に向って皇軍の武運長久を祈った後，再び隊伍を整へて日本青年館に帰還した。（中略）

こえて八日は愈々競技開始の日である。この日秋空一碧うらゝかに晴渡り，午前九時青年団選手を除く全役員選手は表参道に集合して，陸軍戸山学校軍楽隊につゞいてホッケー代表伊藤選手の捧持する聖恩旗を先頭に各競技団体は，それぞれの競技名を記した標識板を掲げ，四列縦隊をつくって蛇々長蛇の大行進を起し，同十時明治神宮拝殿前に進み，国の鎮めの奏楽裡に玉串を奉奠，一同最敬礼のうちに（中略）祈願文を奉て厳に護国祈願を行った。（中略）

かくて一同は再び隊伍を整へて競技場に至り，同十一時から軍楽隊の奏楽裡に入場式を行ひ続いて開会式に移った。先づ芝生スタンドのポールの上に国旗を掲揚したのち皇居を遥拝，賀陽総裁宮殿下の令旨（中略）を奉戴し，有馬会長の式辞に続いて庭球代表川地選手の宣誓あり，聖恩旗を所定の位置に安置して式を閉ぢた[45]。」

その祈願文は，平沼によるものであるが，こう述べている。

「畏クモ治神宮ノ大前ニ明治神宮体育会副会長平沼亮三謹ミ敬ヒ，恐ミテ白ス，常ノ例ノ随ニ明治神宮体育大会ヲ執リ行フニ依リテ，今日シモ各地ヨリ選ハレテ参来，集ヘル選手及ヒ役員諸々大前ニ額キ謹ミ恐ミテ国威宣揚武運長久ヲ祈願シ，併セテ銃後国民ノ赤誠ヲ誓ヒ奉ラムトス。熟々此度ノ事変ヲ考フルニ，其ノ依ツテ来ル所遠ク事態ノ推移棄遽ニ予断ヲ許セズ。更ニ今後ニ来ル可キ幾多ノ難局ヲ予想スルニ難カラズ。而シテ今ヤ出征ノ将兵ガ秋漸ク深クシテ，酷寒将ニ迫ラントスル北，中，南支ノ天地ニ壮烈，勇壮能ク膺懲ノ歩武ヲ進メツゝアルノ労苦ヲ惟フトキ，国民等シク感謝感激ニ堪ヘザル処ナリ。而シテ国民亦決意固ク，一意時艱ノ克服ニ当ラントスルノ心構ヘ全国ニ澎湃トシテ醸成サレツゝアルコトハ，誠ニ御稜威ノ然ラシムル処ニシテ感激ニ堪ヘザルトコロナリ。

吾等銃後ノ国民ハ益々盡忠報國ノ精神ヲ奮ヒ，時艱ノ打開ニ向ツテ勇往，邁進スルノ覚悟ヲ鞏ウシ，出デテハ一死報國ノ覚悟ヲ持チ，留リテハ職分ニ格洵シ，粉骨砕身能ク国民伝統ノ精神ヲ遺憾ナク発揮センコトヲ謹ンデ誓ヒ奉ル。庶幾クバ神霊ノ加護ヲ垂レ給ハランコトヲ[46]。」

また総裁恒憲王は，「本大会ハ明治節トシテ神宮神域ニ於テ挙行セラルゝ所ニ極ワメテ深遠ナル意義ト目的ノ存スルコトハ，諸子ノ夙ニ熟知セル所ナリ，宜シク平素ヨリ鍛練セル心身ヲ以テ，優秀ナル技術ト崇高ナル武士道精神ヲ遺憾ナク発揮シ，進ンテハ国運ヲ双肩ニ擔フノ国民的意気発揚ニ努ムヘシ[47]」と述べている。さらに近衛首相，木戸文相，平沼副会長等は，それぞれ式辞，宣誓，祝辞を述べているが，一例をあげれば，近衛は，こう言っている。

「現下我国未曽有ノ危局二際シ，茲ニ第九回明治神宮体育大会ノ開催ヲ見ルニ至リシハ，洵ニ意義深キモノアルヲ感ズルナリ。抑々明治神宮大会ハソノ成立由来ヨリ推スモ，我国民精神ノ作興並国民体位ノ興隆ヲ目的トスル最モ重要ナル社会行事ノ一タルヤ明ナリ。我国青年壮第ノ第一線ニ起ツ者ハ宜シク挙ツテコノ国家的事業ニ参加シ，之ヲ以テ常時身心鍛練ノ成果ヲ競ヒ，示スベキ最高ノ機会タラシムルベキナリト信ズ。本大会ノ新意義ニシテカクノ如シトスレバ，之ガ刻下ノ時局ニ於ケル重要性ハ自ラ明白ナリ。即チ戦線ノ将兵ヲ援ケテ，ヨク究極ノ勝利ヲ決定スルモノ一ニ懸ケテ，銃後国民ガ身心ノ充実昂揚ニアル秋，本大会ノ貢献スル所真ニ偉大ナルベケレバナリ。今日此ノ日盛儀ニ来リ会セル全国ノ青年子女諸君ヨ冀クハ非常時局下本大会ノ使命ニ深ク思ヲ致シ，相戒メテ，以テ之ガ有終の美ヲオサメラレンコトヲ[48]。」

（3）事変下の競技

当日の「競技は午後一時半，青年団府県対抗競技の中陸上競技は競技場で，剣道は日本青年館で開始され，岩手県の和賀選手は早くも走高跳に一米九五，山形の結城選手は千五百米に四分一秒の

大会新記録をつくって気勢をあげ，新田球場には全国中学校のホッケー部，午後五時からは国民体育館に男子中等学校の籠球戦の火蓋が切られた[49]」が，以下大会の様子は，次のようであった。

「十一月二日　二日の第六日は雲も晴れて，秋陽が輝いた競技場には早朝から籠球一般準決勝，女子決勝，十時半からホッケー準決勝が行はれたが，此日照宮様初め，賀陽宮美智子女王，久爾宮正子女王の宮様方御三方が御成り熱心に御観覧遊ばされた。正午からは都下小学校女生徒や中等学校生等の体操に賑ひ，相撲場には呼物の大学高専第二日の熱戦が展開され，青年館には少年剣士の学童試合が行はれ，其の他野球，庭球，漕艇等何れも予定の如く白熱的試合が展開された。三日には大会創始以来の不幸に見舞はれた。それは一旦止んだ雨が再び前夜から降り始めて，終に野球と庭球の決勝が延期の止むなきに至った事であった。(中略)

併し賀陽総裁宮殿下には雨もおいとひなく，午前十時には牛込河田町の馬場へ，午後一時には尾久へ，午後三時には日本青年館へ台臨遊ばされた御熱心さには，一同一層の感銘を深くしたのであった。かくて野球庭球を除く各競技とも悪コンディションを冒して決勝が行はれ，陸上競技場では予定に遅れて夕闇の中に閉会式が行はれた。(中略)貴賓席前に整列した各競技代表者は東京市青年団木内氏の捧持する聖恩旗に向って敬礼を行った後，平沼副会長閉会の辞を述べ，君カ代を斉唱し，芝生のポールに七日間掲揚された日章旗は陸上競技連盟の高野，平井，堀，笹岡四役員の手によって降下され，之を壇上に捧げ来た時平沼副会長の発声にて一同高らかに天皇，皇后両陛下の万歳を三唱すれば，夕闇の外苑にこだまして目出度閉会の式を終った。[50]」

この9回大会では，全日本体操祭が開催され，10，115名もの児童生徒，学生等が参加し，それらを含めると大会参加者は，実に35,866名にもある。

2．国民精神総動員体制の強化と第10回大会

(1) 神宮大会の国家主義的支配

この10回大会から，神宮体育会主催から政府へと移管されたが，それは言うまでもなく国家総力戦に向けた国民精神総動員体制の拡充，強化を目的としていた。

その経過を『報告書』は，「明治神宮体育大会は第三回より第九回に至るまで明治神宮体育会主催の下に開催せられたのであるが，国民体力の向上を図り，国民の根基を培養することは事変下特に喫緊の要務なるを以て，我国唯一の総合体育大会にして，且つ国民体育祭典とも称すべき本大会は政府に於て自ら之を主催し，その内容の充実強化を図られ度旨，明治神宮体育会々長有馬楠大将より厚生大臣侯爵木戸幸一宛左の通り申請があったので，政府は慎重協議の結果之を受諾することとし，(中略)昭和十四年四月一日附を以て，その旨同会会長宛に通達した。斯くて同年七月十八日には明治神宮神前に於て同会会長有馬良楠大将より厚生大臣広瀬久忠に対し聖恩の旗の引継式を挙行し，之と共に十数年の歴史を有する明治神宮体育会は輝しき業績を残し，更に将来一層盛大ならしむる為，政府に之を移管して爰に解散したのである[51]」と記録している。

政府は，改めて大会実施の方針，方法等について厚生大臣の諮問機関である体育運動審議会に「昭和十四年度ヨリ政府主催ヲ以テ明治神宮国民体育大会ヲ実施セントス，右大会施行ニ関シ時局ニ鑑ミ考慮スベキ事項如何」を諮問し，同審議会は，大正14年3月30日に次のような答申をしている。

「今ヤ我国ハ前古，未曽有ノ一大聖戦ヲ遂行シツツアリ，東亜ノ新秩序ヲ建設シ，肇国ノ理想ヲ達成センガ為ニハ国民体力ノ増強ヲ図リ，国力ノ根基ヲ培養スルヲ以テ最モ緊要ナリト信ズ。今回政府ガ我国唯一ノ国民的体育祭典タル明治神宮体育大会ヲ主催シ，国民精神ノ作興ト広ク一般国民ノ体力向上トニ資セントスルハ，寔ニ時宜ニ適スモノト謂ハザル可ナラズ。殊ニ中央ニ於テノミナラ

ズ，全国市町村ニ亘リ体育大会ヲ開催セシメントスルハ本審議会ノ夙ニ希望セル処ナリ。之ガ実施ニ当リテハ固ヨリ慎重ナル態度ト周到ナル用意トヲ以テ臨ムノ要アリト雖モ，時局ニ鑑ミ特ニ左ノ諸点ヲ考慮セラレタシ。

一、本大会ハ明治天皇ノ御聖徳ヲ景仰シ，神事奉仕ニシテ御祭神ノ大前ニ国民ヲシテ平素ニ於ケル心身鍛練ノ成果ヲ奉納セシメ，進ンデ現下ノ難局ヲ打開シ，東亜新秩序建設ノ礎石タルノ覚悟ヲ誓ヒ奉リ，真ニ国民精神総勢員ノ具現タラシムルト共ニ，一年ヲ通ジ我国ニ於ケル体育ノ中心的行事タラシムルコト。

二，本大会実施ノ時期ハ明治節ヲ中心トシ，其ノ期間ハ可成之ヲ短縮スルコト。

三，本大会ノ実施ニ当リ特ニ留意スベキ事項左ノ如シ。

(1)国民体育ノ国家的意義ヲ強調シ，全国民ヲシテ体育ニ対スル関心ヲ深カラシムルト共ニ，全国民参加ノ下ニ体育実践ノ機会タラシムルコト。(2)体育式典ニ重キヲ置キ，体育行進ノ実施及優秀者ノ表彰等ヲ加ヘ，之ヲ荘厳ニ行ヒ，国民的感激ノ顕現タラシムルコト共ニ，大会ヲ進ジ国民的訓練ノ機会タラシムルコト。(3)中央大会ノ演技ヘ(イ)剣道，柔道，弓道，相撲，国防競技，集団体操ノ種目ニ関シテハ各道府県ヲシテ予選又ハ推薦ニヨリ選出セシメタル優勝者ヲ以テ之ヲ行ハシメ，前記以外ノ運動種目（中略）ニ関シテハ，各種目付夫適当ナル方法ニ依リ予選又ハ推薦セラレタ優秀者ヲ以テ適当数ノ代表的演技ヲ行ハシムルコト。(ロ)水泳，スキー，スケートニ関シテハ，適当ナル時期及場所ニ於テ本大会ノ一部トシ之ヲ行フコト。(ハ)興行ニ出演シツツアル運動競技者ハ之ヲ加ヘザルコト。(4)中央大会ヘノ出場者ハ厳選スルト共ニ，宿舎及鉄道運賃ノ割引等ニ付テハ特ニ便宜ヲ與フルコト。(5)質実剛健ヲ旨トシ，物資ノ愛護節約ニ努メ，戦時経済国策ニ順応スルコト。(6)地方大会ハ成ル可ク全国一斉ニ行ヒ，其ノ演技ハ全市町村ノ参加ヲ目標トシ夫々地方ノ実情ニ即応セルモノヲ実施セシムルコト。

附　帯　希　望　事　項

一、明治神宮国民体育大会施行ニ当リテハ有力ナル委員会ヲ設ケ，実施上遺憾ナキヲキセラレタキコト。一，将来市町村主催ノ地方大会以外ニ道府県主催ノ明治神宮地方大会ヲ開催スル様考慮セラレタキコト。一，明治神宮外苑ニ於テ各種体育運動ヲ実施シ得ル様，速ニ整備拡充を計ラレタキコト。[52]」

すでに明らかなように，体育大会としての明治神宮を否定し，国体主義，皇道主義等を柱とする日本精神の作興を宣揚する「神事奉仕」としての性格を強調するとともに，国家総力戦体制の強化に対応して「国防競技」，「団体行進」等を導入したのである。のみならず，明治神宮大会の開催を機として，全国の市町村ならびに府県でもいわゆる擬似明治神宮大会（＝地方大会）の実施を義務づけることによって，全国民の天皇制国家への絶対帰一を徹底させようとするものであった。そうした体制づくりに体育界は消極的に協力するどころか，むしろ積極的に荷担していったことを銘記しておくべきであろう。蛇足のきらいはあるが，この答申にもとづいて決定された「第十回明治神宮体育大会施行方針」を引いておく。

「一，本大会は第十回明治神宮体育大会と称し，従来明治神宮体育大会に於て奉戴せる『聖恩之旗』は之を継承し，奉戴すること。一，本大会は明治天皇の御聖徳を景仰し奉る神事奉仕にして，御祭神の御前に国民をして平素に於ける心身鍛練の成果を奉納せしめ，進んで現下の難局を打開し，東亜新秩序建設の礎石たるの覚悟を誓ひ奉り，真に国民精神総動員の具現たらしめむると共に，一年を通じ我国に於ける体育の中心的行事たらしむること。一，本大会実施の時期は，明治節を中心とし中央大会の期間は一週間以内に於て可成短縮すること。一，国民体育の国家的意義を強調し，

全国民をして体育に対する関心を深からしむると共に，全国民参加の下に体育実践の機会たらしむること。一，体育式典を重んじ，体育行進の実施及優秀者の表彰等を加へ之を荘厳に行ひ，国民的感激の顕現たらしむると共に，大会を通じ国民的鍛練の機会たらしむること。(中略)一，中央大会への出場者は之を厳選すると共に，其の宿舎及鉄道運賃等に就ては，特に便宜を興ふべく関係方面と折衝協議を為すこと。一，質実剛建を旨とし，物資の愛護節約に努め，戦時経済国策に順応すること。一，地方大会は成る可く全国一斉に行ひ，其の演技は市町村民の参加を目標とし，夫々地方の実情に即応せるものを実施せしむること。一，本大会実施に際しては関係各丁団体，其の他関係各方面との密接なる連絡を保ち，充分なる協力を得て真に官民一致の下に遺憾なきを期すること。[53]」

（2）天皇の「行幸」と奉迎部の設置

ところでこの第10回大会でも秩父宮が総裁に就任しているが，明治神宮大会のファッショ的再編を象徴するものは，何と言っても二度目の天皇の「行幸」であった。

『報告書』は，この行幸について「今回第十回明治神宮国民体育大会を開催するに当たり，畏くも天皇陛下には事変下御多端の折り柄にも拘らせられず，体育御奨励の思召を以て十一月二日本大会に行幸あらせらるゝ旨仰出された。斯くの如きは本会無上の光栄であって，聖慮の洪大無辺洵に恐懼感激に堪へぬ次第である。政府に於てはこの有難き聖慮を全国民に伝達すると共に，この機会に於て益々国民体育の本義を宣揚し，国民体力の増強に格段の力を竭される様地方長官竝各運動団体に通達した[54]」と記録している。

そして10月26日に宮内大臣松平恒雄から大原真厚生大臣宛に，「第十回明治神宮国民体育大会挙行ニ付来十一月二日明治神宮外苑ニ於ケル大会演技場へ行幸可被為在候」との通達が出され，また同月26日と27日には厚生大臣から「来ル十月二十九日ヨリ六日間本省主催ヲ以テ開催ノ第十回明治神宮国民体育大会ニ畏クモ天皇陛下ニハ十一月二日午後親臨遊バサルル有難キ御沙汰ヲ拝シタリ。本大会ノ光栄之ニ過グルモノナク国民体育ニ垂レサセ給フ大御心ヲ拝察シ，洵ニ恐懼感激ニ堪ヘザルモノアリ。依テ此ノ旨貴管下官民ニ伝達セラルルト共ニ光栄ヲ機会トシ，益々国民体育ノ本義ヲ宣揚シ，全国民ノ体力ノ増強ニ最善ノ力ヲ竭シ，優渥ナル聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期セラレ度[55]」との通達が，各地方長官宛と各運動団体長に同様の通達が出されている。

こうして「第十回明治神宮国民体育大会行幸奉迎部」が設置され，「厚生省にては左記の通り行幸奉迎部を設置し，各部の係員及事務分掌を定め，数回に亙り宮内省に関係方面と打合会を開催し奉迎準備上万遺憾なきを期し[56]」ているが，その組織は次のようになっている。

「部　長　　厚　生　次　官　　副部長　　体　力　局　長

(一)総務部　奉迎事務ノ大綱ヲ定メ，各係ノ連絡ヲ図リ，経理其ノ他ニ属セザル事務ヲ掌ル。(長)体育課長，(係) 会計課員，体力局書記室員，体育課員，(二) 警備係　行幸会場ノ会場整理及警戒Tel事務ヲ掌ル。(長) 文書課長，(係員) 警視庁，経理署，文書課員，(三) 儀礼係　奉迎式及迎送ノ際ニ於ケル敬礼等儀礼ニ関スル事務ヲ掌ル。(長) 施設課長，(係員) 施設課員，(四) 貴賓係　行幸当日ニ於ケル皇族王侯ノ台臨ニ関スル手続及其ノ御接待。ニ特別招待者ノ範囲ヲ定メ其ノ招待受付案内等ノ事務ヲ掌ル。(長) 秘書課長，(係員) 秘書課員，(五) 演技係　展覧演技ノ番組，細目ノ決定及当日ニ於ケル演技進行ノ指揮，競技用具ノ配置等ニ関スル事務ヲ掌ル。(長)体育課長，(係員) 関係演技部役員及関係嘱託，体育課員，(六)報道部　行幸ニ関スル情報ノ発表，記事，写真，映画等ノ記録作成及報道関係者ノ指導取締ノ事務ヲ掌ル。(長) 企画課長，(係員) 警視庁，企画課員，(七) 設備交通係　行幸会場ノ設備及貴賓用調度ノ整備竝ニ皇族，王公族特別招待者ノ車場整理ニ

関スル事務ヲ掌ル。（長）会計課長，（係員）警視庁，管理者，会計課員，（八）衛生係　行幸会場ノ衛生ニ関スル事務ヲ掌ル。（長）防疫課長，（係員）警視庁，防疫課員[57]」

また「各係分掌事務ノ細目」が決定されているが，その「概要」は，第５回大会とほぼ同様であるので，割愛する。

（３）国民精神総動員下の大会

こうして第10回大会は開催された。『報告書』は，「支那事変も第三年に入った昭和十四年，非常時日本銃後の護りは愈々固く，漸く持久的体勢整ひ，茲に政府主催の明治神宮国民大会の祭典を見たのは，国民精神の作興並に体力増強の国策を強調し，国民の認識昂揚一致協力の実をあぐるに甚大なる効果を納て得たるものと確信する[57]」と報告しているが，秋季大会の開会式に関して，次のように記している。

「第十回明治神宮国民体育大会の中軸を為す秋季大会は演技種目二十，演技者四万名を以て神宮外苑を中心として，正に豪華なプログラムは繰り展げられんとしてゐる。この日正午代々木練兵場に集合した一万五千の役員，演技者代表は聖恩の旗を先頭に，各道府県地区及び演技部別の標識を押し立て，八列縦隊を以て明治神宮に参拝行進をなし，零時半名誉会長阿部首相，会長小原厚相以下役員参列の下に行はれた大会奉告と時を同じうして参拝し，直ちに北参道より外苑競技場に向的て体育大行進を開始した。

約一千名を一団とした長蛇の列は聖域より外苑競技場に連り，その間専修，商業外約十組の学校音楽隊を各団の先頭に配置して潑剌たる生気を溢らした。かくて午後二時競技場入口に達して堂々入場。トラックを半周して所定の位置に整列すれば，同三十五分には総裁秩父宮殿下御着。同四十分大会委員長佐々木体力局長の開会の辞によって開会式に移る。国旗掲揚，君ケ代奉唱，宮城遥拝，黙禱と進み，総裁宮殿下より令旨（中略）を奉戴し，一同感銘。小原会長式辞，演技者代表宣誓，各方面よりの祝辞があった。[59]」

秩父宮は，「明治神宮国民体育大会ハ茲ニ回ヲ重ヌルコト十回，今回ハ新ナル機構の下ニ一段ノ躍進ヲ期シタルニ，其ノ参加者ハ未曽有ノ多数ニ達シ，本大会ガ挙国的ナルノ意義愈々具現シツツアルハ真ニ欣快ニ堪ヘヌ所デアル。天皇陛下ニ於カセラレテハ此ノ事変下御多端ノ折柄ニモ係ハラセラレズ，再ビ行幸ノ光栄ヲ賜ハルルハ一ニ国民体育ノ向上ニ対スル聖慮ノ深キニ依ルコトト拝察セラレ，本大会ノ役員竝ニ参加者ハ勿論，全国体育関係者一同ノ斎シク感激スルト共ニ，其ノ責任ノ重大ナルヲ肝銘スベキデアル。全国ノ代表者トシテ此ノ栄誉アル本大会ニ参加する諸子克ク平素鍛練セル所ノ精神，技倆ヲ発揮シテ，興亜ノ聖業ヲ翊賛シ奉ル国民的意気ヲ中外ニ発揚シ，以テ本大会ノ旨趣ニ副ハンコトヲ切望シテ止マヌ次第でアル[60]」と述べている。

また大会会長の小原直は，「今ナ我ガ国ハ曠古ノ大業ノ完成途上ニ在り，真ニ剛強ナル国民ヲ練成するノ必要最モ切実ナルノ時デアリマス。此ノ時ニ当リテ本大会ノ開催ハ其ノ意義極クメテ深遠ナルモノアルヲ思ハネバナリマセヌ。諸君ハ各選バレテ本大会ニ参加スルノ栄誉ヲ担ヒ，其ノ責任甚ダ重大デアリマス。飽クマデモ正々堂々敬虔，真摯ナル態度ヲ堅持シテ，平素ニ於ケル心身鍛練ノ成果ヲ明治神宮ノ大前ニ奉納シ，以テ本大会ノ旨趣ニ副ハレルコトヲ希望シテ已ミマセヌ，以上ヲ以テ開会式ノ辞ト致シマス[61]」と式辞を述べ，さらに阿部首相は，「今ヤ我邦ハ国ヲ挙ゲテ東亜新秩序建設ノ大業ニ邁進シ，之カ完遂ノ為国力ヲ充実シ，国運ヲ伸暢スル要愈々切ナルモノアリ。而モ国力ノ充実，国運ノ伸暢ハ国民体力ノ向上発達ニ俟ツ所極メテ大ニシテ，国民体育ハ益々其ノ重要性ヲ可フルニ至レリ。此ノ時ニ当リ明治天皇ノ御懿徳ヲ景仰シ，国民精神ノ作興ト国民体力ノ向上

トヲ目的トスル本大会カ帝都ノ聖域ニ開会セラレ，健康日本ヲ代表スル幾万ノ青年男女諸君カ，明治神宮ノ大前ニ於テ国民体育ノ精華ヲ発揮スルノ盛事ヲ見ルハ邦家ノ為寔ニ慶祝ニ堪ヘサルナリ。冀クハ来会ノ諸君須ク深ク本大会ノ真義ニ徹シ，士道ノ精神ニ則リ，正々堂々最善ヲ盡シ，以テ所期ノ目的ヲ達成セラレンコトヲ[62]」と挨拶している。

この後東京市民音楽隊500名，麹町高女生と500名，合計1,000名からなる大合唱が「明治神宮国民体育大会の歌[63]」を合唱し，「聖恩之旗」を奉送し，3時過ぎに佐々木委員長の閉会宣言によって退場行進がはじまった。続いて2,500余名の男女による建国体操，音楽行進等が行われ，大会1日の行事は終了したのである。以後天皇の行幸までの大会の模様は，次のようなものであった。少々長くなるが，引いておきたい。

「二日（十月三十日）　今日は，いよいよ待望の諸競技が全国代表の間に決戦の火蓋を切った。先づ午前八時半外苑競技場に行はれた排球，籠球の男女府県対抗，一般対抗を初めとして，十四種目が全市十五ケ所の各競技場に分散挙行された。道府県，台湾，朝鮮，関東州等から参加した代表が各々全力を傾注しての熱戦に早くも大会気分は横溢した感があった。[64]」

「第四日（十一月一日）　大会四日秋天高く晴れ渡れば神宮外苑を中心に一高，戸山学校，神田国民体育館，尾久，田園の各地に華やかに競技が白熱化して，英気に満ちた青少年の胸は益々躍り立つ。午前八時神宮競技場で行はれたホッケー決勝と内苑弓道場には畏クモ総裁秩父宮殿下の台臨を仰ぎ，同競技に御精通の殿下には終始御入念に御観覧あらせられた。本日は中等野球と尾久に行はれた艦隊鎮守府対抗カッター戦及び青年団の相撲と柔道に，それぞれ熱戦が演じられた。[65]」

資料―26　大会に臨席の昭和天皇

そして第五日，天皇の行幸の日であった。『報告書』は，当日の様子をこう記している。

「畏くも天皇陛下には銃後国民の体力向上に寄せさせ給ふ大御心より菊花薫る明治節の前日たる今日，親しく外苑競技場に行幸あらせられ，各種演技を天覧あらせられた。昭和四年第五回大会に臨幸あらせられて以来御二回，事変以後初めての行幸とて役員，演技者等関係諸員の感激は一入であった。この日薄曇りながら秋気清く，大会総裁秩父宮，同妃両殿下をはじめ奉り，賀陽宮，竹田宮，李王妃，王世子李，各宮殿下にも午後一時すぎ同会場に台臨。

更に今日特に参集した朝野の外国使臣を始めとして役員，演技者，一般参観者は場内をぎっしりと埋め，粛として御持ち申上げるうち，天皇陛下には午後一時半陸軍々楽隊の『君が代』奏楽裡に

競技場入口に着御，総裁秩父宮殿下をはじて奉り，各皇族殿下，阿部名誉会長，小原会長以下役員の御出迎へを受けさせられ，岡田副会長の御先導にて一旦便殿に入御，同三十五分再び海軍々楽隊の『君が代』奏楽裡にスダンド中央の玉座に臨御あらせられた。

この時フイールドに整列の役員，演技者代表四千名及場内全員は森体育官の号令一下一斉に最敬礼，次いで小原会長は玉座前の式台に登り，恭しく奉迎文を奉読した。（中略）

次いで同会長の発声により聖壽の万歳を奉唱し，総員の最敬礼によって奉迎式を修了。引き続き晴れの天覧演技に移った。まづ東京府下工場従業員一千二百四十名の大日本国民体操をはじめ，日本産業体操，学童柔道形，野外剣道団体試合，中等，師範蹴球試合，陸上八百米，百米，女子四百米継走決勝，排球一般女子決勝，籠球中等府県対抗決勝，銃剣術，国防競技青年学校，中等決勝，青年団土嚢運搬継走決勝，自転車四粁団体決勝，大日本女子青年体操，大日本青年体操等十種目に及ぶ各演技が競技場一ぱいに陛下の御前に展開され，陛下には秩父宮殿下の御説明を受けさせせられつゝ約二時間に亙って終始御熱心に天覧さらせられた。

かくて陛下には同三時五十七分，三度軍楽隊の『君が代』奏楽裡に便殿に入御。御少憩の後同四時各皇族殿下，諸員奉送裡に競技場発御，天機殊のほか麗しく宮場に還幸あらせられた。かくして天覧の光栄に感激した役員，演技者は各競技場に於て異常の緊張と喜びに充ちて記念すべき今日の活躍に全力を傾池した。[66]」

そして最終日の11月３日は，「事変下と云ふに四万数千の精鋭を集め，六日間に亙って数十万の観衆に絶賛の感銘を與へた今次大会は，昨日の感激を今日に持越して明治節の佳きこの日を最後として，さしも絢爛を誇ったスポーツ祭典に名残を惜しむかの如く，朝来押し寄せた各競技場の観衆の文字通りすし詰めの超満員，競技場も，野球場も既に午前中に入場を禁止するの已むなきに至り，未曽有の盛況裡に各競技共，最後決戦に火花を散らした。今日はこの中央大会に呼応して全国一斉に市町村主催の地方大会が行はれ，幾千万の若人は健康日本の真の姿を画きだし，夕闇迫る外苑競技場で行はれた厳粛な閉会式を最後に豪華，多彩なプログラムの全部を終了しやうとして居る。畏くも総裁秩父宮殿下には，この日妃殿下と個別々に会場に台臨あり，（中略）最後に閉会式場たる外苑競技場にお成り遊ばされた。

午後四時五十分，折からメインスタンド側のトラック，北から南に長蛇の列をなして行進中の東京市主催の大会奉祝音楽大行進四千名の多彩な行列が通過し終わると，愈々閉会式に移った[67]」という。会長小原直は，次のような閉会の挨拶をしている。

「畏クモ天皇陛下ニオカセラレマシテハ事変下御多端ノ折柄ニモ拘ハラセラレズ，昨日ニ本競技場ニ行幸遊バサレ，親シク諸演技ヲ天覧在ラセ給ヒマシタコトハ啻ニ本大会ノ無上ノ光栄タルノミナラズ，国民体育ニ垂レサセ給フ深キ大御心ヲ拝察シ奉リ，国民一同，洵ニ恐懼，感激ノ極デアリマシテ，関係者一同責任ノ重且大ナルヲ痛感致ス次第デアリマス。更ニ総裁秩父宮殿下ニハ開会ニ当リ，洵ニ優渥ナル令旨ヲ賜ヒ，大会ニ臨ム私共一同ノ嚮フ所ヲ示サセ給ヒ，且会期中屢々台臨恭ウ致シマシタコトハ関係者一同ノ感激措ク能ハザル所デアリマス。選手諸君は選バレテ本大会ニ参加シ，明治神宮ノ大前ニ正一堂々，平常鍛練スル所ヲ発揮セラレタノデアリマス。

何卒総裁宮殿下ノ令旨ヲ奉戴シ，今後一層心身ノ鍛練ニ努メ，本大会ニ於テ示サレタ力ト意気トヲ益々昂揚シ，以テ銃後国民タルノ責務ヲ全ウシ，聖恩ノ万一ニ耐ヘ奉ランコトヲ切望シテ止ミマセン。終リニ関係者方面ノ方々ニ御礼申上ゲタイト存ジマス。本大会が極メテ盛会裡に無事終了シ得マシタコハ，一ニ明治神宮当局，各競技団体，其ノ他関係方面及大会役員ノ方々ノ絶大ナル御授助ト御協力トニ依ルモノデアリマシテ，此ノ点厚ク御礼申上ゲル次第デアリマス。此ヲ以テ閉会ノ

挨拶ト致シマス。[68]」

そして「かくて聖恩旗護送，国旗降納，次いで小原会長の発声にて天皇陛下の万歳を三唱すれば，満場之に和して代々木の社もゆるぐかと思はるばかりに高唱し，さしも豪華を極めた第十回明治神宮国民体育大会秋季大会は国民の感激裡に幾多の収穫をあげて無事終了した[69]」と，『報告書』は，書き残している。この10回大会には，前回大会の25,751人をはるかに越え，44,529人の役員，選手が参加していることが，報告書には記されている。

（4）第10回神宮大会地方大会の実施

ところで，この大会は，それまでの大会とは質を異にし，天皇制国家の屋台骨を支え，国体主義，日本精神主義，皇国主義思想の浸透をはかる一大イヴェントとして企画されている。それは，明治神宮体育大会と同時に開催された「地方大会」と「全国一斉体操祭」であった。

この地方大会は，加藤橘夫が報告しているように，体育運動審議会の諮問答申のなかの「殊ニ中央ニ於テノミナラズ全国市町村ニ亙リ体育大会ヲ開催セシメントスルハ本審議会ノ殊ニ希望セル処ナリ」。また「全国民参加ノ下ニ体育実践ノ機会タラシムルコト」，「さらに「地方大会ハ成ルヘク全国一斉ニ行ヒ，其ノ演技ハ全市町村民の参加ヲ目標トシ，夫々地方ノ実情ニ即応セルモノヲ実施セシムルコト」に対応するものであった。

この地方大会の実施に際し，9月6日に「茲ニ通牒致置候第十回明治神宮国民体育大会中央大会ニ呼応シテ，全国市町村ヲシテ一斉ニ第十回明治神宮国民体育大会地方体育大会ヲ開催セシムルコトト相成候ニ付テハ，左記要綱御了知ノ上国民精神ノ作興国民体力ノ向上ミ図ル挙国的体育祭典タルノ実ヲ挙グル様御配意相成度此段及通牒候也」との通牒「第十回明治神宮国民体育大会地方大会ノ件」を発しているが，具体的には，この大会を家族主義的に実施すること，開会式を必ず実施すること，明治神宮の遥拝を欠いてはならないこと，大会会場，参加人員総数の報告を義務づけること等が規定されており，徹底した中央集権的な支配のもとに実施されている。

当日（11月3日）に実施された中央大会に呼応して，各地方（樺太，台湾，満州を含む）では学校，警防団，男女青年団，婦人会，産業組合等各種の団体が，行事の内容について協議し，実施されている。加藤橘夫によると，それらは「一，学校生徒児童，警防団，青年団，産業組合等各種の団体員を総動員して市町村民運動会を行ったもの，二，学校の運動会を中心として，その父兄或はそれに男女青年団を加せて運動会の形成をとったもの，三，工場従業員を中心とし，簡単な体育運動を加へて体操大会の形をとったもの，四，体力章検定会を行ったもの，五，青年層を動員して山野跋渉，登山等の団体行進を行ったもの，六，海に添う土地に於て和船競漕を行ったもの，七，青年層を目標として武道大会を行ったもの，八，ラジオの中継によって単に全国一斉体操の時間の行事のみを実施せるもの[70]」等があったというが，一斉体操の時間だけ体操をやってお茶を濁そうとする地域があったことに注目したい。

14. 第11回明治神宮国民体育大会

（1）第11回大会開催方針と「皇紀二千六百年奉祝」大会

この大会の特徴は，何よりもそれが「皇紀二千六百年奉祝」大会として実就されていることである。「報告書」の「施行方針」は，「明治神宮国民体育大会は明治天皇の御聖徳を景仰し，平素に於ける心身鍛練の成果を奉納する神事奉仕にして，国民の気魄とを中外に顕揚し，国民錬成の機会たると共に，我体力の精髄を成すものなり。而して本年は紀元二千六百年に当り，且明治神宮鎮座二

十周年に相当するを以て之を記念する為，大会を一層充実し，窮り無き皇運の彌栄を奉祝すると共に，万邦無比の光輝ある歴史を有する我国民の意気と感激とを発揚せる一大挙国的体育大会たらしめんとす[71]」と言い，「右の趣旨に基づき，概ね左に依り厳粛，且盛大に之を施行せんとす」と述べるとともに，主として「一，国民体育の国家的意義，特に現時局下に於ける国民体力増強の重要性を強調し，全国民をして体育を実践せしむると共に，体育に対する関心を深からしむること。二，最高の演技を網羅し，肇国二千六百年の我国体育の状況を八紘に顕示し，紀元二千六百年を記念するに相応しい国家的体育大会たらしむること。三，体育式典及体育行進は之を荘厳，厳粛に実施し，深き国民的感激の顕現たらしむると共に，国民の意気と力とを発揚せしむること[72]」等を揚げている。

また神宮大会のみならず，奉祝記念行事として「十月初旬より十月二十七日に至る期間全国道府県庁所在地と東京とを結ぶ四コースを選定し，沿道市区町村民をして其の区域を継走せしめ，以て各道府県代表者の奉祝文を中央大会に伝達せしむ[73]」奉祝継走，さらに宮崎，畝傍間駅伝競争等11月下旬の約10日間，宮崎神宮より橿原神宮の区間における道府県対抗駅伝競争である宮崎・畝傍駅伝の開催が予定されていた。

（２）天皇の行幸と中止

第10回大会と同様に，天皇の「行幸」とともに11月３日を期して全国一斉に地方大会を実施することとしている。天皇の行幸について『報告書』は，「天皇陛下には昭和四年十一月一日第五回大会に当り大会々場に行幸あらせられ，昭和十四年第十回大会に際し重ねて大会々場に行幸あらせられ，親しく各種演技の天覧を賜り，役員選手は固より全国民に斎しくこの無上の光栄に浴し，恐懼，感激，宏大無辺なる聖慮に副ひ奉らんことを堅く誓ったのである。然る処佳き日紀元二千六百年を寿ぐ第十一回大会に際し，畏くも天皇，皇后両陛下には本大会に行幸荒らせられるべき旨仰出された。斯くの如きは本大会無上の光栄であって，国民体育の上に注がせ給ふ大御心の程を拝察し奉り，洵に恐懼，感激に堪へぬ次第である[74]」と記している。

宮内大臣松平恒雄は，昭和15年10月16日に厚生大臣金光庸夫にその旨を通達し，ただちに行幸行啓奉迎部を設置し，特別番組の編成，準備に当たっているが，その式次第，動員数等は，以下の通りであった。

奉迎式　集団体操　大日本国民体操（全国男子体育指導者）700名，武道　野外剣道集団試合（都下男子中等学校生徒）500名，姿道野外演武（都下小学校児童）640名，集団格闘（陸軍戸山学校職員，学生）150名，仮標斬突（徒歩）（陸軍戸山学校職員，生徒）５名，仮標斬突（乗馬）（陸軍予科士官学校職員）７名，体力章検定　100米　2000米　重量運搬　走巾跳　手榴弾投　懸垂屈臂（全国青年団員）55名，集団体操　大日本青年体操　転回運動　組合運動（日本体育会体操学校生徒）300名，陸上競技　一般男子マラソン出発　一般女子100米決勝　一般男子1500米決勝，男子中等学校府県対抗800米継走決勝　一般男子槍投決勝，一般女子砲丸決勝，自転車　学生対一般対抗2000米決勝，籠球　一般女子府県対抗決勝，排球　一般女子対抗決勝，国防競技　牽引継走，手榴弾投擲突撃　障碍通過競争　行軍競争，集団体操，日本産業体操（都下工場従業員）1,575名，ホッケー　一般男子決勝，集団体操　女子青年体操（都下女子中学校，女子体育専門学校生徒）2,600名，体育行進，役員行進　約１万名，演技終了[75]。

スポーツ大会というよりは，まさに軍事訓練大会にふさわしいものとなっている。これとともに厚生省は，厚生次官の名をもって各地方長官と運動団体長に対し「畏クモ天皇，皇后両陛下ニハ十

一月一日，紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮国民体育大会ニ行幸，行啓アラセラルベキ旨ノ有難キ御沙汰ヲ拝シ候，本大会ハ昨年行幸ノ光栄ニ浴シ，本年重ネテ天皇，皇后両陛下ノ行幸，行啓ヲ辱ウスルハ実ニ無上ノ光栄ナルト共ニ，国民体育ノ上ニ注ガセ給フ大御心ノ程ヲ拝察シ奉リ，洵ニ恐懼感激ニ堪ヘザル次第ニ御座候，政府ニ於テハ此ノ優渥ナル大御心ニ副ヒ奉ル様益々国民体育ノ本義ヲ宣揚シ，全国民ノ体力地強ニ最善ヲ竭シ度念願致居候ニ付テハ右充分御諒承ノ上（中略），今後益々国民体育ノ普及向上ノ為格段ノ御盡力相成度[76]」と，体力増強になお一層努めるよう通達を発している。

しかし10月30日，宮内省より天皇の都合により行幸中止の連絡があった。その理由は，風邪気味のためということであった。

（2）開会式と近衛首相の挨拶

こうして第11回秋季大会は，「十月二十七日より十一月三日に至る八日間，外苑陸上競技場を中心として東京市の内外に於て夏季及冬季大会の四種目を除いた二十四種目の演技絵巻が華々しく繰りひろげられた。第一日の二十七日は秋晴れの好天気に恵まれ，午前八時半代々木練兵場に集合した約一万五千の役員選手は明治神宮参拝の後，堂々長蛇の列を作って体育行進を行ひ，午前十時二十分より陸上競技場に於て華々しく開会式が開かれた。総裁秩父宮殿下には御病気御静養の為め御臨場遊ばされぬ事となったが，畏くも三笠宮殿下には軍務御多端なるにも拘はらせられず，此の日を始めとして連日各競技場に成らせられ，親しく演技を御覧遊ばされたのは役員一同感激の至りであった。開会式は三笠宮殿下を御迎へし，法政大学庭球部菊池選手の捧持する聖恩の旗を奉迎した後，同二十五分役員選手の入場行進に移り，一同定置に就いて愈々開会の式が行はれた。金光厚生大臣総裁宮殿下の令旨を奉読し，式辞宣誓を経て総理大臣，明治神宮宮司の祝辞あり，次いで全国四十の幹線を経て蜿蜒五三〇〇キロ，一三〇〇の市町村民を動員せる奉祝継走隊によって運び来られた全国各府県長官の賀詞を岡田東京府知事が奉読[77]」している。

秩父宮は，「今回新ニ我ガ友邦満州国ノ来リ加ハレルアリ，総参加者未曽有ノ多数ニ上リ，大会ノ内容亦益々充実セルヲ見ルハ予ノ欣快トスル所ナリ。本大会ハ天皇陛下臨幸ノ光栄ニ浴スルコト已ニ両度。而シテ今復天皇，皇后両陛下ノ行幸，行啓ヲ辱ウス。聖慮ノ宏遠ナルヲ思ヒ，感激ニ任ヘズ。二千六百年ノ往昔神武天皇御肇国ニ際シ，済々タル幾多ノ青年ガ身心ヲ捧ゲテ国礎確立ノ皇謨ヲ賛嚢シ奉リシヲ想フ時，方ニ優渥ナル大詔ヲ拝シテ，興亜ヨ聖業ヲ翼賛シ奉ルベキ諸子の責務ヤ誠ニ重且大ナリト謂フベシ。此ノ光誉アル本大会参加ノ諸子ハ須ク平素鍛練セル所ヲ発揮シテ，充分ナル成果ヲ収メ，以テ甚大ナル時局下ノ精神ト気力トヲ中外ニ宣揚セムコトヲ期セヨ[78]」と挨拶し，また金光厚生大臣は，「畏クモ重ネテ総我秩父宮殿下ヨリ令旨ヲ賜ハリ，又三笠宮殿下ノ台臨ヲ忝ウスルノ光栄ニ浴シマシタコトハ，誠ニ恐懼，感激ニ堪ヘヌ次第デアリマス。抑々明治神宮国民体育大会ハ明治天皇ノ御聖徳ヲ景仰シ，国民ノ平素ニ於ケル心身鍛練ノ成果ヲ神宮ノ大前ニ奉納スル尊厳ナル国家的行事デアリマス。而シテ今年ハ明治神宮鎮座二十周年ニ当リ，本大会モ茲ニ十一回ヲ重ネルニ及ンダノデアリマス。殊ニ本年ハ恰モ光輝アル紀元二千六百年ニ相当シ，而モ現在我ガ国ハ東亜新秩序建設ノ巨歩ヲ進メ，更ニ欧州ニ於ケル帝国ト意向ヲ同ジウスル友邦ト結ンデ，世界平和ノ克服ニ邁往シツツアルノデアリマシテ，我等一億国民ハ愈々其ノ責務ノ重大ナルヲ感銘シ，益々肇国以来大精神ヲ振作スルト共ニ，旺盛ナル士気ト剛健ナル身体トヲ錬成致サネバナリマセヌ。則チ此ノ年此ノ時ニ於ケル本大会ノ開催ハ極メテ深遠ナル意義ヲ有スルモノト信ジマス[79]」と式辞を述べ，さらに近衛首相は次のような祝辞ヲ述べている。

「各地ヲ代表スル精鋭ガ茲ニ参集セラレ，光輝アル紀元二千六百年ヲ奉祝シツゝ，平日鍛練セルトコロヲ明治神宮ニ厳粛ニ奉納セラレマスコトハ誠ニ慶祝ニ堪ヘヌ所デアリマス。畏クモ天皇，皇后両陛下ノ行幸，行啓ヲ辱ウスル本大会ハ至上ノ光栄ニ浴スルノデアリマス。更ニ只今総裁宮秩父宮殿下ノ優渥ナル令旨ヲ賜ハリ，且三笠宮殿下ノ台臨ヲ辱ウ致シマシタコトハ，恐懼，感激の極ミデアリマシテ，関係者一同ノ責務ハ洵ニ重且大ナリト申サナケレバナリマセヌ。時局ハ未曽有ノ重大転機ニ直面シテ居リマスコノ秋コソ全国民ノ意気ト力トハ真ニ強ク，且正シク顕現セラレナケレバナリマセヌ。諸君ハ今後克ク令旨ヲ奉戴シテ，常ニ身体ヲ鍛ヘ気力ヲ養ヒ，以テ大御心ニ答ヘラレンコトヲ切望シテ止マス次第デアリマス。以上ヲ以テ祝辞ト致シマス。[80]」

開会式終了の後，外苑競技場では集団体操，ラグビー，自転車訓練等のほか野球，送球，体操が行われ，「第一日とは云へ，戦時下若人の活躍を見んものと外苑競技場は殆ど満員の盛況を呈したのは，意義深き大会の第一日として相応しいものであった[81]」という。問題は，大会第一日目の模様である。結局天皇の行幸は中止されたが，その代わり多くの皇族が顔を見せている。

「第六日の十一月一日は風もなく澄み渡り，空高く秋晴れの好天気であった。この日三笠宮殿下を始め奉り，高松宮殿下，賀陽宮殿下，同妃殿下，梨本宮殿下，李鍵公殿下，同妃殿下を外苑競技場に御迎へ申上げ，野球，蹴球，ラグビー，陸上競技，相撲，弓道，柔道，剣道，排球，籠球，軟式庭球，ホッケー，体操，自転車，硬式庭球が十五会場に於て行はれた外，外苑競技場に於ては特別演技が午前十一時より三時半迄行はれた。（中略）天覧取止めの為め，午前演技の一部を変更して特に加へられたもので，左のプログラムにより繰展げられたが，その真摯なる熱闘と粛然たる規律とは，非常時日本の若人の真髄を現はしたもので，実に大会の華とも云う可きであらう。[82]」

当日に行われた「特別演技」は，先にあげた内容とほぼ同じものであったが，大日本国民体操の指揮者に本間茂雄，回転運動，組み立て運動の指揮者に浜田靖一，大日本女子青年体操の指揮者に伊沢エイ等の名前がある。

そして大会最終日の閉会式の様子を『報告書』は，「秋季大会最終日（三日）は来た。此の佳き年，此の佳き日，八日間の最後を飾る力闘が続けられ，燃え上がる若人の意気は沸いて各会場を圧すれば，観衆も亦外苑始まって以来と云はれ，さすが外苑の競技場も揺がんばかりであった。行はれた競技は剣道，弓道，騎道，射撃，陸上競技，蹴球，籠球，漕艇，卓球，自転車，相撲，硬式庭球，集団体操でそれぞれ覇者が決定された。午前三時暁暗をついて行はれた青年団の多摩御陵参拝強歩も四十五キロを強行軍して掛声も勇ましく外苑競技場に帰着すれば，陸上競技三千米障碍に於ても日本新記録が樹立された。かくて八日間の真摯敢闘の後午後四時五十分外苑競技場に於て三笠宮殿下の台臨を仰いで厳かなる閉会式を挙げた。（中略）興亜日本の若人の意気と力と技の全能を傾け盡した八日間に亘る敢闘は場内に照りはゆる聖火の如く清く，美しく，輝しく明日の日本への誓ひを深く心に抱いて，溢るゝ大観衆と共に唱和する万歳の声と共に歴史的体育大祭典の幕を閉ぢた[83]」と伝えている。

最後に会長の金光厚生大臣は，「本日紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮国民体育大会ノ行事ヲ終了シ，茲ニ閉会式ヲ挙行スルニ当リマシテ一言御挨拶申上ゲマス，畏クモ総裁秩父宮殿下ニハ重ネテ優渥ナル令旨ヲ賜ヒ，親シク我等一同ノ嚮所ヲ啓示アラセラレ，又三笠宮殿下ヲ始メ奉リ，各宮殿下ノ台臨ヲ賜ハリマシタコトハ関係者一同感激措ク能ハザル所デアリマス，選手諸君ニハ選バレテ本大会ニ参加スルノ栄誉ヲ担ハレ，明治神宮ノ大前ニ真摯敢闘，克ク平素鍛練スル所ヲ発揮セラレタノデアリマスガ，今後総裁宮殿下ノ令旨ヲ奉戴シテ，一層心身ノ鍛練ニ努メテ本大会ニ於テ示シタル力ト意気トヲ益々昂揚セラレ，以テ銃後国民タルノ責務ヲ全ウシテ，聖恩ノ万一ニ対ヘ奉

ラレンコトヲ切望シテ已ミマセヌ，ナオ満州国ヨリ参加セラレマシタル選手諸君ニハ，本大会ヲ契機トシ，彌々固ク相結ンデ，日満一億一心ノ友交ニ寄与セラレンコトヲ希望致シマス，終リニ本大会ガ極メテ盛大裡ニ無事終了スルコトヲ得マシタノハ，一ニ明治神宮当局，各道府県，各競技団体，其ノ他関係方面及大会役員ノ方々ノ絶大ナル御援助ト御協力トニ依ルモノデアリマシテ，此ノ点厚ク御礼申上ゲマシテ閉会ノ御挨拶ト致シマス[84]」と挨拶している。

（3）宮崎・畝傍駅伝競争

この駅伝競争は，すでに指摘したように体育運動主事会議（5月23日～25日）の決定を具体化するものであるが，同主事会議は，「地方大会ニ就イテ」のなかで「予算ノ都合上国庫補助ハ支出サレナイガ，明治節ヲ期シ全国一斉ニ行ヒ，其ノ演技ハ全市町村民ノ参加ヲ目標トシテ実施サレ度イ[85]」としている。ここにも，安上がりに国民を天皇制ファジズム下に吸収しようとする意図が露骨にあらわれている。

それは「宮崎市宮崎神社をスタートして神武天皇御東征の御順路を九州，山陽道を経て橿原神社に至る十日間一千キロに及ぶ大競争で，参加選手は涙ぐましき迄に連日奮闘を続けた外に宿舎に於ける訓練，団体的行動に終始して実に戦時下銃後の若人たるの範を示したものと云う可く，浴道もまた全く人を以て埋められ。之を誇張して云ふならば一千キロの人垣をつくったとも云う可く，新動向の運動競技を如実に示した点に意義深き大競争であった[86]」と記録しているように，明らかに戦時下における総動員運動の一環であった。

同年11月26日に開会式が行われ，その式次第は「選手役員集合，宮崎神社第一鳥居前出発，八紘台（現平和台公園　筆者註）着，一，選手役員入場，二，高松宮殿下奉　迎　三，開会ヲ宣ス（アナウンス），四，聖恩之旗奉迎（旗手井坂作勝），五，君が代奉唱，六，宮城遥拝，八，明治神宮遥拝，九，祈願黙禱，一〇，令旨奉読，一一，会長式辞（樋貝保健院総裁），一二，二千六百年頌歌，一三，選手代表宣誓，一四，護符授与，一五，競争タスキ授与，一六，明治神宮国民体育大会ノ歌合唱，一七，宮崎県知事選手激励ノ辞，一八，奉祝駅伝競争役員長挨拶，一九，万歳三唱，二〇，聖恩之旗奉送，二一，高松宮殿下奉送，二二，閉会ヲ宣ス（アナウンス）[87]」となっており，そのほとんどが，天皇賛美と崇拝，明治神宮遥拝といった行事で埋めつくされている。

（4）明治神宮地方大会の実施と家族主義の強化

上述の駅伝競争の実施とともに，さらに全国一斉体育行事ならびに体操が実施されている。「紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮国民体育大会地方大会に関し（中略）各道府県学務部長に通牒し，盛大に執行すべく計画した[88]」という「地方大会要項」は，「大会を通じ参加者は勿論参集者をも時局の認識を一層深めると共に，大会は質実剛健を旨とし，祭騒ぎに惰せざること」，「一村一家族主義の下に誇張の中にも明朗にして，力強き大会たらしめること」，「傷痍軍人出征家族の招待，慰安等をなす[89]」ことを目的とし，いわゆる慈恵主義の下に，すべての地域とあらゆる階層の国民をも巻き込んでいったのである。

こうした天皇制国家の体育行事は，国民の健康を保全するということよりも，「明治神宮遥拝」のほか，各種の官製団体の幹部と協議し，「神社仏閣」等で実施すること，「雨天で中止の場合」でも必ず後日実施すること，「時局の認識を一層深める」とともに「一村一家族主義の下に・・・傷痍出征家族の招待，慰安をなす」といったように，ぬかりなくファシズム体制への追順を強要することに意図がおかれている。しかも，これらの行事の協力団体にはすべての体育，スポーツ団体が加わ

っているのである。また注目すべきは，本大会の「施設衛生係」が「衛生係は救護が主要な任務であるが，単にそれのみではなく，参加者の心身の全機能の科学的測定並これが最高に発揮せしめられる様に，生活科学の調査，研究，指導を行ひ，以て体位向上の資にしたいと考へているのである[90]」として，各中等学校選手，青年団選手，一般選手，海軍々人選手等の身体測定を実施していることである。指摘するまでもなく，この大会が体力管理制度と連動していることは明らかである。

４．国家総力戦と国民体力総動員体制の確立

１．大東亜建設と第12回大会

（１）臨戦体制下の大会方針

日米関係の雲行きが怪しくなるとともに，神宮大会はスポーツ大会と言うよりも，「神事奉仕」としての性格とあわせて，その開催方針に「競技場は戦場に通ず」としているように，軍事演習そのものとしての様相を示し始めている。

『報告書』は，「大会施行対針」の前段で「明治神宮国民体育大会は，明治天皇の御聖徳を仰景し，平素に於ける心身鍛練の成果を奉納する神事奉仕として，皇国民の気迫と体力とを中外に顕揚し，国民錬成の機会たると共に我が体力国策の精髄を成すものなり。而して世界的変革期に際し総力を挙げて，大東亜共栄圏の建設に邁進せるとき挙行せらるゝ本大会に於ては特に体育の国家的意義の発揚を旨とし，愈々熾に剛強真摯なる国民的意気と訓練の実を昂揚せしめ，真に高度国防国家の要請に即応したる挙国的大体育祭祭典たらしめんとる[91]」と述べ，次のような方針をあげている。

「一，国民体育の国家的意義，就中体育に依る国民的意気の昂揚，敢闘精神の錬成，団体訓練の強化，体力の増強，国防的各種技能の練磨の重要性を強調し，全国民をして国民体育に対する関心を深からしると共に，之を実践せしむること。

二，本大会は明治神宮御祭神に対する神事奉仕たると共に体育運動最高の行事たるに鑑み，之が参加者は人物，体力に於ても健全，優秀なる者を選抜すること。

三，体育式典及体育行進は之を荘厳々粛に実施し，深き国民的感激の顕現たらしむると共に，参加者に対しては選ばれて，本大会に出場せることの国民的栄誉と責務とを一層銘記する機会たらしむること。

四，体育に対する現時の国家的要望に即応し，且つ現下内外の諸情勢に鑑み演練を整齊し，府県対抗種目を中心として最高の演練を網羅し，尚之が実施に当りては競技場は戦場に通ずる覚悟を以て，飽くまでも真摯敢闘し，而後巳の士道精神を発揚すると共に，規律統制ある行動を以て終始し，銃後国民の意気と力，決意と訓練の成果とを顕示すること。

五，神事に奉仕するに相応しく，且は国民的訓練の範を示すの気概を以て，全役員参加者には競技場以外に於ても節度ある行動を執らしむること，之が為道府県選手団の組織活動に一層留意すると共に，尚選手団は之を通じ愛郷精神の涵養にも資せしむること。

六，国民体育の尊厳性の認識の下に観衆に規律統制ある行動を行はしむると共に，適宜大日本厚生体操を実行せしめ，真摯明朗なる雰囲気の裡に体育の本義に即したる国民的訓練を実施すること。

七，本大会の実施に際しては中央地方の関係官庁，関係団体は固より各種国民組織，其の他関係方面と密接なる連絡を保ち，十分なる協力を得て，真に官民一致の挙国的体育大会たるに遺憾なきを期すること。[92]」

また特に次のような「臨戦態勢下ニ於ケル実施方針」を決定している。

「第一，演練方針　一，基礎的体力ノ錬成ヲ図ルト共ニ国防的訓練的種目ニ重点ヲ置クコト，一，広ク国民各方面ノ体育ヲ実施シ，性，年齢，職業等ノ別等ニ対シ国家ガ奨励スル体育ヲ範示スルコト，一，国民ノ間ニ広ク普及性ヲ有スルモノヲ考慮スルコト，一，時局ニ鑑ミ，大会期間ハ努メテ之ヲ短縮スルコト，一，以上ノ趣旨ニ依リ，種目ノ選択ヲ為スニ当リテハ，特ニ厳選スルコト，第二，式典其ノ他行事運営方針　一，式典ヲ厳粛ニ行フハ勿論，一般行事ノ運営ニ付テハ努メテ外国ノ模倣ヲ避クルコト，第三，地方大会　一，地方大会ハ特ニ之ヲ重ンジ，厳粛且旺ニ行ハムルコト，[93]」

（2）国民精神作興と大会風景

『報告書』は，この大会全体を「日支事変勃発以来既に五年の歳月を経て，第十二回明治神宮国民体育大会は昭和十六年九月二十二日の夏季大会を皮切りに，翌十七年二月八日に終ったスキー大会を最後として半年に亘る大体育祭典を無事終ったのであった。その半年の中には大東亜戦争と云ふ我が国未曽有の大事が突発したのであったが，体育のことは国民精神作興と体位の向上の為め，一日も忽にすべからざるは勿論なれば，我等は益々体育報國の熱意に燃えて此の神事奉仕を遂行し得たことは，明治神宮の御聖徳の然らしめたものなるは勿論，参加した役員選手諸君の絶大なる協力の然らしめたこと深く感謝する次第である[94]」と記録しているが，秋季大会の様子をこう報告している。

「云ふまでもなく秋季大会は本大会の根幹をなすもので，行はれた演技種目実に二十。遠くは初参加の中南支代表があり，隣邦満州国からの参加もあり，其の他我が国の内外地から馳せ参じ，何れも郷土の栄誉を担って，前線の兵士にもまけぬ意気と熱意とを以て，明治大帝の大前に平素の訓練の成果を繰り広げたのであった。

第一日　十月三十一日は午前七時四十分，役員選手一同は秋冷肌にしむ代々木練兵場に集合，聖恩之旗を先頭に明治神宮に参拝して，堂々一万数千の若人は体育行進を起して外苑競技場に至る。午前九時半には総裁高松宮殿下会場来着，会長小泉厚生大臣開会を宣すれば，烈々の気溢れる若人達は勇ましく縦隊をつくって入場行進，総裁宮殿下には畏くも御挙手の礼を賜れば感激彌が上にも深く，やがて嚠喨たる君が代のラッパ響き渡れば，向井十郎（早大）選手の手によって中央柱にスルスルと日の丸の旗は掲げられ，三好詮李君（府立航空工業）が捧げ持する聖恩之旗は粛々として入場，厳粛の気場に満つ。宮城遥拝，君が代奉唱，護国の英霊に対する感謝並に出征軍人の武運長久及び傷夷軍人の平癒祈願の黙禱を捧げたる後，畏くも総裁宮殿下より令旨を賜り[95]」，ついで小泉会長が，次のような式辞を述べている。

「今ヤ聖戦下四年有余ヲ閲シ，培々臨戦態勢ヲ鞏固ニシテ大東亜共栄圏ノ確立ニ邁進スルノ時，敢テ本大会ヲ開催シ，我等国民ガ平素鍛練セル成果ヲ明治神宮ノ大前ニ奉納スル所以ノモノハ，極メテ深甚ナル意義ヲ有スルモノデアリマス。抑々国民体力ノ錬成ト国民精神ノ振作トガ国家興隆の根基ヲ焼スモノデアルコトハ，改メテ茲ニ説明スルニ及バズ。現在我等ノ眼前ニ展開セラレツゝアル所ノ各国興亡ノ事実が物語ツテ居ルノデアリマス。帝国ノ現在並ニ将来ニ思ヲ致ストキ，其ノ精神ニ於テ，体力ニ於テ如何ナル険艱ヲモ突破シテ進ムベキ剛健ナル国民ノ錬成ヲ必要トスルコト，未だ曾テ今日ヨリ急ナルハ有ラザル所デアリマス。即チ臨戦態勢下ニ於ケル本大会ノ実施方針ヲ国民ノ各職業，各年齢，男女ノ基礎的体力ノ錬成ト国防的，訓練的種目ノ実施ニ指向シ，国家ガ奨励スル体育ヲ之ニ依テ範示シ，式典ヲ厳粛ニ行フハ勿論，一般行事ノ運営ニ付テハ努メテ外国ノ模倣ヲ避クルコトト致シタノデアリマス。

本大会ハ正ニ我ガ国体育運動ノ精華デアリ，本大会ニ於ケル諸君ノ成績ハ全国民ノ体力並ニ精神力ノ結晶デアリマス。大日本帝国ノ若人ノ輝ヤシキ力ハ諸君ニ依ツテ代表セラルゝノデアリマス。（中略）願クハ正々堂々平素練磨セル所ノ実力ヲ発揮シ，銃後若人ノ意気ト力トヲ中外ニ宣揚シテ体力奉公ノ誠ヲ顕ハシ，以テ総裁宮殿下ノ令旨ニ応ヘ奉ランコトヲ希望スル次第デアリマス。[96]」

さらに続いて軍部の主魁である首相東条英機（名誉会長）は，次のような祝辞を述べている。

「今ヤ皇園ガ未曽有ノ非常時局ニ直面シ，肇国以来ノ道義的使命ヲ遂行スベク，一億一心鉄石ノ意志ヲ益々堅クシ，愈々不伐ノ信念ニ燃エ，邁進シテ止マザル躬行実践ニヨツテ，凡ユル艱難ヲ必ズ突破スベキ今日，畏クモ新興日本ノ国礎ヲ築カセ給ヒシ明治天皇ノ神鎮アリ給フ神宮ノ大前ニ，全国ヨリ優秀精鋭ナル皆サンガ斯ノ如ク盛大ニ参集セラレ，平素鍛練セラレタル旺盛ナル意気，剛強ナル体力，卓越セル技能ヲ茲ニ発揮，奉納セラルルコトハ真ニ国家的盛事デアリマシテ，私モ亦心カラ欣快ニ堪ヘナイ所デアリマス。

然モ本大会ニハ遠ク北支，中支，蒙古ヨリ同胞ノ参加アリ，且盟邦満州国ヨリ同ジク参加セラレアリ。即チ隆々タル国運ノ進展ヲ既ニ本大会ニ於テトスルコトガ出来ルノデアリマス。同時ニ本日ヨリ四日間内地全国ヲ挙ゲテ壮年，青年，少年，男女ノ別ナク体育御奉公ノ精神ヲ昂揚セラレ，基礎的体力ノ錬成ヲ期スルト共ニ，国防的訓練ヲ強化向上セラルルノデアリマス。

此ノ如キ挙国的大会ガ行ハレル所以ハ皇国ノ興隆ヲ期シ，聖業ヲ完遂スル為ニ，今日ヨリ将来ニ亙リ最モ光栄アリ，然モ最モ重大ナル責任ガ将ニ皆サンノ双肩ニ担ハレテキルカラデアリマス。凡ソ古今東西ノ国家興亡ノ歴史ヲ繙キマスルニ，国民ニ旺盛ナル士気ガ溢レ，国民ノ体力ガ強健デアツテ，其国家ノ衰亡シタル例ヲ見ナイノデアリマス。而モ今ヤ帝国ハ将ニ国運隆替ノ闘頭ニ立ツテ克ク皇国ノ使命ヲ果シ其興隆ヲ図ラネバナリマセン。

此ノ重大ナル責任ニ対スル自覚ト献身報國ノ覚悟ニ基キ，益々旺盛不屈ナル気魄ト剛強，雄到ナル体力ヲ彌栄ニ錬成向上セラレ，皇国民タルノ責務ヲ現在ニ於テ全フセラレンコトヲ信シ，私ハ強ク之ヲ諸君ニ期待スル次第デアリマス。即チ茲ニ明治天皇ノ御聖徳ヲ景仰シ奉リ，平常鍛練セラレタル優秀ナル成果ヲ神宮ノ大前ニ於テ十二分ニ発揮，奉仕セラルルト同時ニ，皇国民ノニ気魄ト体力ヲ大イニ中外ニ顕揚シ，体育ノ国家的意義ヲ発揚シ，以テ総裁宮殿下ノ深厚ナル令旨ニ一同応ヘ奉ラレンコトヲ希ツテ本大会ノ祝辞ニ代フル次第デアリマス。[97]」

これらの式辞，祝辞等が終わると，「これより明治神宮国民体育大会の歌を斉唱し，聖恩之旗を奉送して開会式を終り，役員選手一同は再び隊伍堂々退場して，午前十一時十五分の集団体操に始り，午後から陸上競技，ラグビーが外苑競技場で行はれ，外苑相撲場では産業従業員の県対抗の相撲が開かれ，野球は外苑と戸塚の両球場で柔道は青少年団府県対抗が講道館で，また籠球の男女一回戦が外苑水泳場コートで，銃剣道は戸山学校で中学生府県対抗と大学高専個人演武，日比谷公園コートでは軟式庭球，国民体育館では体操競技，蹴球は一般一回戦が青師と第一生命両会場で自転車は代々木練兵場と芝公園競技場，浜松町コートでは排球男女一回戦が一斉火蓋を切った。何れも初戦とは云へ，秋晴れに恵まれて百花一時に開くの観があった[98]」と記録されているが，以後の大会の様子は次のようであった。

「第二日も秋晴れに恵まれた十一月一日であった。（中略）殊に今年より独立種目として加入した滑空競技は遠く茨城県石岡町訓練所に行はれた。秋空に輝く聖恩之旗を迎へ，空に舞ふグライダーの姿は雄々しくも亦美しいものであった。戦時下大空の護りに念願する若人達は荒鷲魂を，そこに培ふことが出来るのである。第三日の十一月二日も多彩に色どられた日であった。（中略）中にも初登場の行軍訓練は前日大山を発足した鉄脚部隊四百数十名，途中津田山に露営の夢を結んだ後，午後

一時半，隊伍堂々外苑競技場に到着したのであった。此の日我等が最も感激した事は，総裁宮殿下には妃殿下と御一緒に午後三時の厚生体操の時スタンドの数万の観衆と共に体操を遊ばされた事であった。御自ら範を垂れさせ給ふ有り難き思召は，国民として一時も忘れてはならぬ処のものである。十一月三日の第四日は最終の日である。(中略)此日，我等は限りなき光栄に充ちたものであった。それは皇太子殿下の台臨であった。過去十一回の大会に未だ嘗てなき光栄が本大会に輝いたのであった。

四日間の間繰り広げられた熱戦は何れも実を結び，外苑競技場に男女の音楽行進が行はれた後，午後四時から閉会式が挙行され各種別の優勝者には，それぞれ会長から表彰状が授与され，暮れるに早い秋の日が外苑の森に落ちて薄暮迫る頃，センターポールの日章旗が降下せられたのであった。四日間に行はれた演技二十一種，会場二十二ケ処の多きに亘り，全国から集まる者一万数千選ばれて中央の大会に出場し，郷土の栄誉を双肩にかけて致闘した四日間であった。此の四日間総裁宮殿下には各会場をくまなく御順覧遊ばされ，台覧の栄を賜ったので，若人達の感激は彌が上にも湧立ったのであった。」

この大会に参加した39,040人になる。

ま　と　め

こうして第13回大会（昭和17年）からは「明治神宮国民錬成大会」と改称され，第14回大会（昭和18年，地方大会のみ）をもって戦争による国民の疲弊と敗走を続けるという末期的状況のなかで崩壊していく。それは，国民体力総動員の展開であり，同時に体育，もしくはスポーツを軍事訓練と「八紘一宇」の大義名分の下に国民を侵略戦争へと誘導するファッショ化の手段に解体していく過程でもある。ここで確認しておかなくてはならないことは，その過程が，単に権力的な強制によってではなく，「聖恩の旗」（＝日の丸）に頭を垂れ，それに荷担をした多数の国民（体育指導者，研究者を含めた）の存在によって展開されたことである。

第１回大会から12回大会までに参加した役員，選手，マス・ゲームの参加者数は，『報告書』の数字だけでも287,585人にのぼっており，それに，さらに第13回大会（秋季大会のみで役員3,361名，選士45,239名，第14回大会は不詳），全日本体操祭，神宮大会地方大会，宮崎・畝傍駅伝，地方予選の参加者，役員等，そしてそれ等のイヴェントの観衆を加えれば，『報告書』が指摘しているように，数千万という想像を絶する数になると思われ

資料―27　明治神宮体育大会参加者数

（単位：名）

回　数	開催年度	役員数	選手数	備　　考
第１回	大正13年	849	3144	
第２回	大正14年	1326	29913	内合同体操　23600
第３回	大正15年	635	5239	同合同体操含マズ
第４回	昭和２年	857	26538	内合同体操　21150
第５回	昭和４年	1979	23610	
第６回	昭和６年	1998	10159	
第７回	昭和８年	3079	25653	
第８回	昭和10年	3223	22616	内合同体操　9077
第９回	昭和12年	2638	23113	内合同体操　10115
第10回	昭和14年	5300	21231	合同体操含マズ
答11回	昭和15年	7857	50238	
第12回	昭和16年	3600	12480	
計		33341	254244	

る（資料―27参照）。

その意味からも，この神宮大会が天皇制ファシズム体制を国民に浸透させ，吸収していくうえでいかに重大な役割を果たしたかが理解される。最後に，この神宮大会の延長線上に昭和18年10月21日に明治神宮競技場で行なわれた学徒出陣の壮行会が，脳裏にダブル。

補　　註

(1)　『第五回明治神宮体育大会報告書』　ｐ１
(2)　同前　ｐ１
(3)　同前　pp２～３
(4)　同前　pp３～５
(5)　同前　pp９～12
(6)　同前　pp12～13
(7)　同前　pp22～23
(8)　同前　pp23～24　傍点筆者
(9)　同前　pp32～33　傍歩筆者
(10)　同前　pp26～27
(11)　同前　pp27～28
(12)　同前　ｐ28
(13)　同前　pp30～31　傍点筆者
(14)　同前　pp33～34　傍点筆者
(15)　『聖恩之旗由来記』『第六回明治神宮体育大会報告書』扇　資料―25は，同書による。
(16)　同前　ｐ１
(17)　同前　pp２～３　傍点筆者
(18)　同前　pp３～４
(19)　同前　ｐ８
(20)　同前　pp10～11
(21)　同前　ｐ14
(22)　同前　pp14～15
(23)　同前　ｐ15
(24)　同前　pp19～20　傍点筆者
(25)　『第七回明治神宮体育大会報告書』　ｐ１
(26)　同前　ｐ２
(27)　同前　pp７～８
(28)　同前　ｐ９
(29)　同前　ｐ13
(30)　同前　ｐ30　傍点筆者
(31)　同前　Ｐ18　傍点筆者
(32)　同前　ｐｐ22～23　傍点筆者
(33)　この会期中の11月３日に第２回全日本体操祭が実施されているが，神宮外苑体操祭式場では日本体育会体操学校（男子600名，女子1,270名），東京女子体操音楽学校（70名），東京府立第六中学校（男子120名），東京府立第五高等学校（120名），四谷区第六小学校（160名）等2,340名が動員されている。
(34)　『第八回明治神宮体育大会報告書』　pp１～２
(35)　同前　ｐ３
(36)　同前　pp８～９
(37)　同前　ｐ10

(38) 同前　p 11
(39) 同前　p 14
(40) 同前　pp15～16
(41) 同前　p 17
(42) 同前　p p 18～19
この第 8 回大会でも，初日から（29日）11月 3 日にかけて体操大会が実施され，そのプログラムは，広井家太を中心とする18名からなる体操準備委員会によって作成されている。
(43) その出場者は，児童生徒，学生等実に 1 万人近い9,007名に上っている。
(44) 『第九回明治神宮体育大会報告書』　pp 1 ～ 3　傍点筆者
(45) 同前　pp 6 ～ 7　傍点筆者
(46) 同前　p 7
(47) 同前　p 8
(48) 同前　p 10
(49) 同前　p 14
(50) 同前　pp16～17
(51) 『第十回明治神宮国民体育大会報告書』　pp 6 ～ 7
(52) 同前　pp10～11
(53) 同前　pp15～16　傍点筆者
(54) 同前　p23
(55) 同前　p 23
(56) 同前　p 24
(57) 同前　p p 24～25
(58) 同前　p 36
(59) 同前　p 42
(60) 同前　p 1
(61) 同前　p 42
(62) 同前　p 43　傍点筆者
(63) 「神宮大会の歌」とは，懸賞募集によって厚生省が選定し，山田耕筰の作曲によるものであった。
「秋の空　ゆたかに澄みて　菊薫る　代々木の聖地　我等　今　御霊仰げば　畏さに　心はふるふ
聖恩旗　輝き渡り　感激の　若き血燃えて　吾等　今　意気も高らに　興国の　力を誇る　君が代の　御恵うけて　鐵と　強く雄々しき
吾等　今　神の御前に　体育の　精華を競ふ　青雲の　たなびく極　大八州　護らひ立てる
吾等　今　大き御民の　身と心　磨かむここに」(同前　pp32)
(64) 同前　p 45
(65) 同前　p 46
(66) 同前　pp46～47（資料―26）は，同前　扉による。
(67) 同前　pp47～48　傍点筆者
(68) 同前　pp48～49
(69) 同前　p 49
(70) 同前　p 495
(71) 『第十一回明治神宮体育大会報告書』　p 3　傍点筆者
(72) 同前　pp 3 ～ 4　傍点筆者
(73) 同前　p 5
(75) 同前　pp 7 ～ 9
(76) 同前　p 10
(77) 同前　p 19
(78) 同前　同前　p 1

(79) 同前　pp19～20
(80) 同前　pp22～23
(81) 同前　p 26
(82) 同前　p 27
(83) 同前　p p 31～32
(84) 同前　p p 32～33
(85) 同前　p 33
(86) 傍点筆者
(87) 同前　pp643～644
(88) 同前　p 50
(89) 同前　pp50～52　傍点筆者
(90) 同前　p 68
(91) 『第十二回明治神宮国民体育大会報告書』　p 3　傍点筆者
(92) 同前　pp 3 ～ 4　傍点筆者
(93) 同前　pp 5 ～ 6　傍点筆者
(94) 同前　p 7
(95) 同前　pp12～13
(46) 同前　pp13～14　傍点筆者
(97) 同前　pp14～15
(98) 同前　pp15～16
(99) 同前　16～17
(100) （資料―27）は，同前　p 41より作成

その他の参考文献

江口圭一　『十五年戦争小史』　青木書店　1986年
万　　峰　『日本ファシズムの興亡』　六興出版社　1989年
入江克己　『日本ファシズム下の体育思想』　不昧堂出版　1986年

（平成2年4月20日受理）